

論語集解



萬葉集註釈(仙覺抄)



日本古代の学問と萬葉集

筑波大学附属図書館特別展



大智度論

筑波大学附属図書館特別展

日本古代の学問と萬葉集

平成13年10月22日（月）～11月2日（金）

筑波大学附属図書館（中央図書館貴重書展示室）

主催 筑波大学哲学・思想学系 文芸・言語学系 附属図書館

挨拶

本学は、明年に設立三十年をむかえる新しい大学ですが、その前身はさらに百年、はるか明治五年の師範学校の創設にまでさかのぼります。その伝統は、高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学を経て、今日にまで受け継がれております。ことに国語・国文学の研究と教育においては、前身校および本学は、優れた教授陣を擁し、多くの有為な研究者や教育者を輩出し、学界と教育界に確固とした位置を占めてきました。広大なキャンパスに巨大な建物が林立する現在の本学のようなすからは、それを偲ぶことはなかなか困難ですが、本学附属図書館の蔵書には、はっきりとその偉業を温ねることができます。このたび萬葉学会が本学を会場として開催されるにあたり、文芸・言語学系の芳賀紀雄教授を中心とするチームの献身的なご努力をいただき、本学附属図書館が所蔵する国語・国文学関係の古典資料を展示し、広くご鑑賞いただく機会を得たことは、その意味でも、まことに慶ばしいことです。

秋のひとつとき、「日本古代の学問と萬葉集」の世界を心ゆくまでお楽しみください。

平成十三年十月

筑波大学附属図書館長 山内 芳文

目次

ご挨拶……………3

展示目録……………5

日本古代の学問……………6

 図版・解題……………8

『萬葉集』研究の流れ……………16

 図版・解題……………18

写経と仏教教学の世界……………26

 図版・解題……………28

展示目錄

一	論語集解（正平版写）	一五	訂正常陸国風土記
二	論語集解（要法寺刊本）	一六	神樂歌考（神遊考）
三	論語集註	一七	東遊歌曲・神樂歌・風俗歌曲・催馬樂歌曲
四	古文孝經	一八	日本紀略書
五	古文尚書	一九	三国史記
六	文選	二〇	大智度論
七・八	李白觀瀑圖・剡溪訪戴図《参考》	二一	瑜伽師地論
九	歴聖大儒像《参考》	二二	金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法
一〇	萬葉集註釈（仙覚抄）	二三	金剛頂大教王經
一一	古葉略類聚抄	二四	止観輔行伝弘決
一二	萬葉集（校異本）	二五	十八契印
一三	詞林采葉抄	二六	文字反
一四	萬葉名所歌集	二七	反音極字抄 二種
		二八	古言衣延辨證補

唐制を継受した律令国家である古代の日本において、国家を支える官吏養成機関としての大学・国学で教授される学科の中心は、いうまでもなく儒教の經典であった。儒教の徳治の精神を體現した官吏による統治が理念としてあったのである。『養老令』（学令）では大学で教授すべき經書として、『凡そ經は、『周易』『尚書』『周礼』『儀礼』『礼記』『毛詩』『春秋左氏伝』をば一經と為よ。『孝経』『論語』は、学ぶ者兼ねて習へ』（原漢文）と見え、さらには教授にさいして使用すべき諸經の注釈をも次のように規定している。「凡そ正業を教授するには、『周易』には鄭玄・王弼が注。『尚書』には孔安国・鄭玄が注。三礼・『毛詩』には鄭玄が注。『左伝』には服虔・杜預が注。『孝経』には孔安国・鄭玄が注。『論語』には鄭玄・何晏が注。ただしこの条は基づいた唐令（『大唐六典』による）をほぼ引き写したもので、『令集解』の引く古注にも「鄭玄注は、今の読むところにあらず」というように、日本では実際に利用されていなかった注をも挙げていたのである。小島憲之氏によると、三礼（『周礼』『儀礼』『礼記』『毛詩』は規定通り鄭玄注であるが、その他の実際に利用された注は、『周易』は王弼注、『尚書』は孔安国伝（『古文尚書』）、『左伝』は杜預注（『春秋経伝集解』）、『孝経』は孔安国伝（『古文孝経』）、『論語』は何晏注（『論語集解』）であったという。

続いて「学令」では諸經を量の多少によって、『礼記』『左伝』を「大經」、『毛詩』『周礼』『儀礼』を「中經」、『周易』『尚書』を「小經」と類別し、修習の選択の組み合わせを規定しており、ことにその条の最後に「孝経』『論語』は、皆兼ねて通ずべし」とこの二經は必須であることを明記している。これと呼応するように、「孝課令」の明經科試験の評定基準の規定で「論語』『孝経』全く通ぜずは、皆不第と為よ」とあるように、この二經は律令官人のもっともスタンダードな經典とされており、習熟の度合いも高かったのである。

『養老令』よりも以前の『大宝令』では、これらの諸經以外に、『文選』『爾雅』の二書が經書に準じて加えられていたようである。現に「選叙令」では進士科の試験において、「進士には、明らかに時務に關ひ、并せて『文選』『爾雅』を読む者を取れ」と選考基準に挙げられている。また『弘仁式』の諸經修習の期限規定に「三史（『史記』『漢書』『後漢書』『文選』各々）中經に准ぜよ」とあるように、中經相當の四百六十日の講説期間が設けられていたことが分かる。この背景には日本の令制における文章科の重視があったものと思われる。いっぽうトネリコースを歩む下級官人や地方にまで、『文選』が普及していたことが分かっており、上代の文学を支える裾野の広さを知ることができる。『文選』にも数種の注が存したが、經書ではないゆえ『令』に注の規定はない。ただこの書についても小島憲之氏によって、初唐の李善注の利用が明らかにされている。

後漢末から東晋末にいたる知識人のエピソードを集めた、宋の劉義慶『世説新語』（梁の劉孝標注）も上代びとによく読まれた漢籍であった。狩野尚信筆「刺溪訪戴図」は「世説新語」任誕篇の王子猷の故事を踏まえたもので、山陰にいた王子猷が雪の夜に興に乗じて小舟を仕立て、一晩かかって刻にいた親友の戴安道の邸の門前まで至ったものの、そのまま中に入らずに帰ったという、逸興の境地を描いたものである。『萬葉集』（巻十七・三九六五〜三九六六前書簡、大伴家持）に「興に乗ずるの感ありと雖も、杖を策するの勞に耐へず」（原漢文）とあるのもこの故事を踏まえたものである。この屏風の右隻である「李白観瀑図」も、李白の「望廬山瀑布二首」を踏まえたもので、隠逸の気味を表す画題として室町時代に盛んに描かれ、詩の題材ともなったものである。

大学寮において毎年二月八月の上丁の日に行われていた積奠という儀式も、唐制に倣ったもので、積奠とは犠牲を供物として神前に捧げて祭ることをいい、孔子等を祭る儀式である。「学令」には、「凡そ大学・国学は、年毎に春秋の二仲の月の上丁に、先聖孔宣父（孔子）に積奠せよ」とあり、『続日本紀』文武天皇大宝元（七〇二）年二月丁巳（十四日）が初見である。このうち、養老・天平期に二度入唐した吉備真備によって儀式次第は整備されていった。真備は唐の弘文館の画像を日本にもたらし、百濟画師に写させて大学寮に置いたという。これが「唐本」と呼ばれて積奠画像の基本として尊ばれ、巨勢金岡の転写本が作られるなどした。こうした経緯から日本の積奠は唐のよう
に画像を置いたり壁面を描いたりするのではなく、聖賢の画幅を掛ける形で行われるようになった。『延喜式』（大学寮）では孔子像を廟堂奥に南面して置き、その東西に『論語』先進篇に見える十人の高弟、いわゆる十哲の画像を配列する形であったようだ。その後、積奠は細々と続けられていたが、応仁の乱以降廃絶してしまっただけでなく、江戸時代初期、寛永九（一六三二）年、徳川義直が上野忍岡（現在のの上野公園の地）に先聖殿（孔子廟）を建て、林羅山に寄進した。翌十年、羅山によって積奠は復興された。そのさい寛永九年、羅山は、積奠での使用や学生への教材も兼ねて、儒教の聖人・賢人二十一人の肖像画を制作することを企画し、狩野山雪に描くように依頼している。それが現存する「歴聖大備像」二十一幅である。このうち本学に蔵する宋儒六幅は当時の積奠に使用されたもので、『昌平志』所載の「殿上列位図」によると、孔子を中心に左右に四配（顔子・曾子・子思・孟子）の彫像が南向きに並び、兩廡（兩脇の部屋）に六人の宋儒が従祀されていた。孔子と四配とは彫像が常置されていたので、積奠にあたってこの六幅の画像が掛けられたのである。これらの像は『礼記』王制にいう「昭穆」の制という祖先の位牌を並べる序列の法則によって左右に振り分けて配列されている。つまり①周子 ③程叔子 ⑤邵子が「昭」、②程伯子 ④張子 ⑥朱子が「穆」である。

『萬葉集』を始めとする上代の文学を支えた主体である律令の官人たちの思惟を大きく掣取っていたのは、かような中国の儒教的世界だったのである。この世界の裏打ちによって上代の文学は生動したといえよう。

（参考）

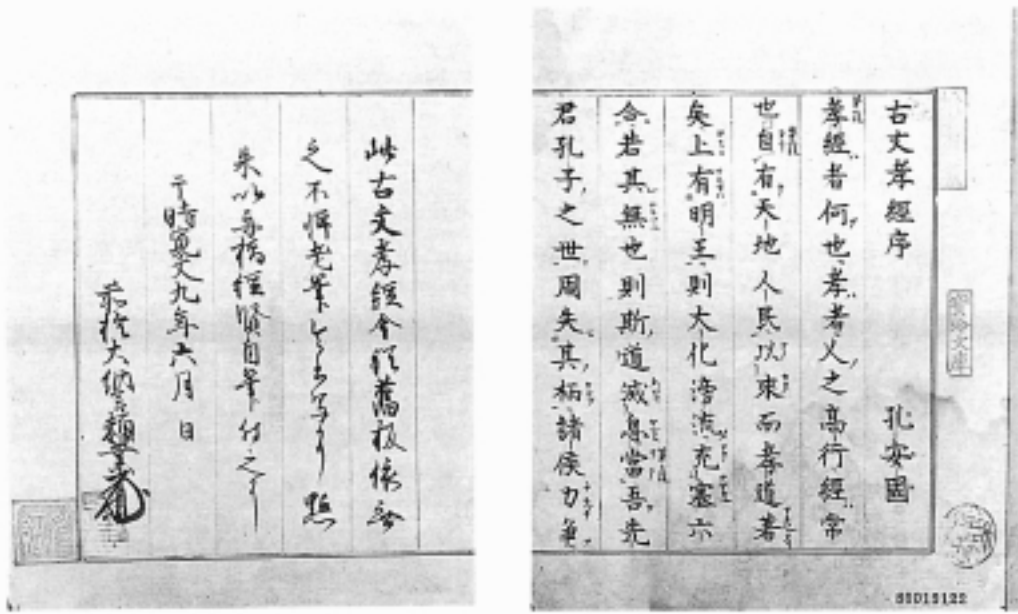
小島憲之『国風暗黒時代の文学 上』瑞書房 一九六八

東野治之『正倉院文書と木簡の研究』瑞書房 一九七七

芳賀紀雄『万葉集比較文学事典』『別冊国文学 万葉集事典』学燈社 一九九三

杉原たく哉『中華図像遊覧』大修館書店 二〇〇〇

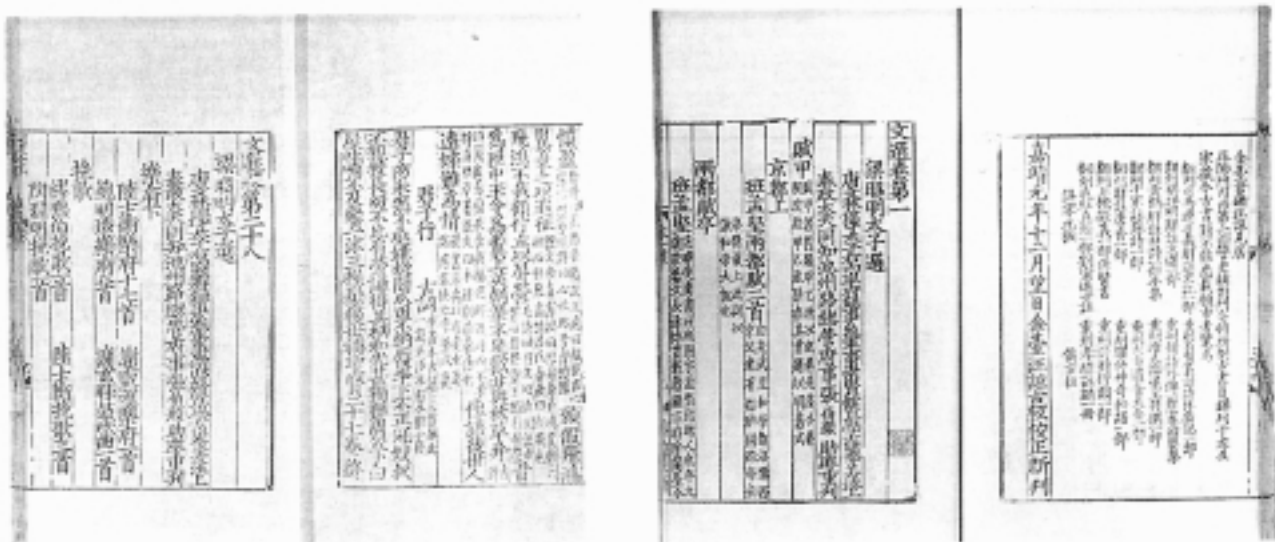
四 古文孝經



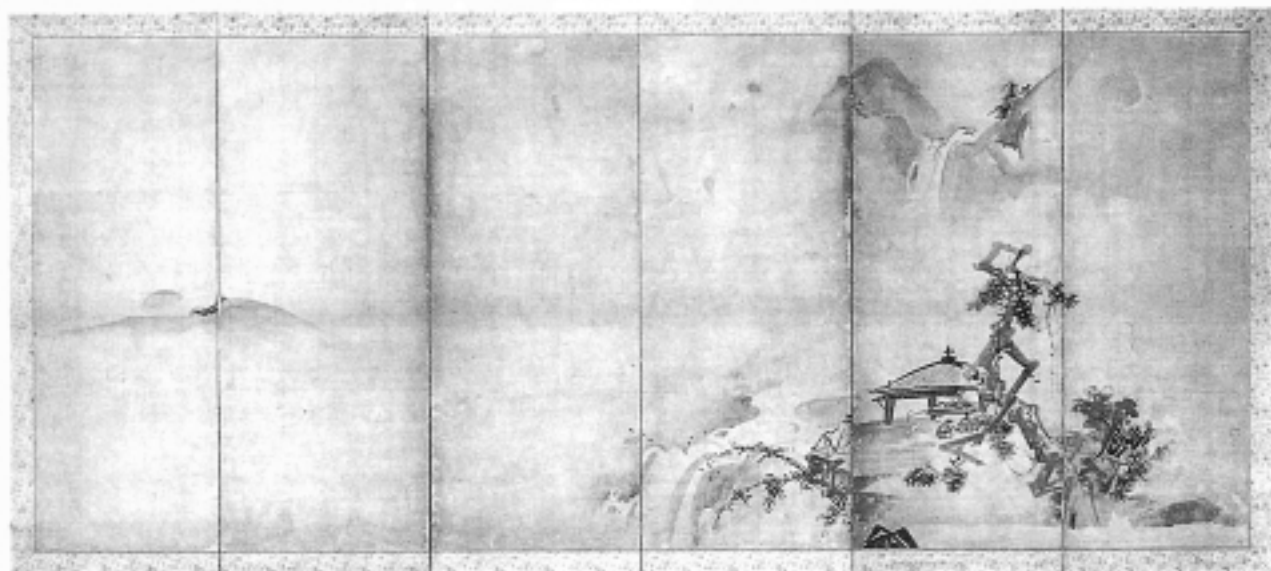
五 古文尚書



六 文選



七 李白觀瀑圖



九 歷聖大儒像



九—①
周子

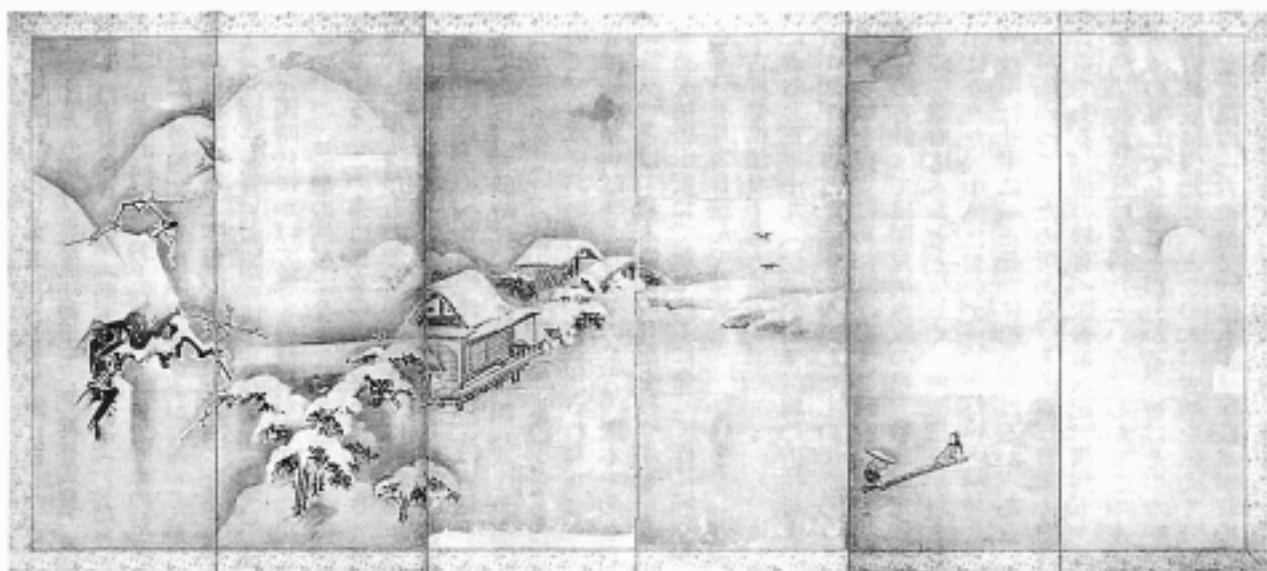


九—③
程子



九—⑤
邵子

八 刻溪訪戴圖



九—⑥
朱子



九—④
張子



九—②
程子

室町時代中期写。題簽 魯論 内題 論語。縦一八・一四、横二一・八四。袋綴。全丁匡郭に沿って本文を切り大半紙に貼り付けてある。印記 円融藏。盛風之印。(二印とも梅井宮盛風法親王)。北総林氏藏。浩卿。(二印とも林泰輔)。

『論語』は春秋時代末期(前五世紀)に成立したといわれる。孔子(前五五〇—前四七九年)とその門人、および、門人たちが同士の対話をまとめた書。漢代には『齊論』『古論』『魯論』の三種のテキストが存在したが、『魯論』が現在のテキストの祖と考えられている。本書の題簽に「魯論」とあるゆえんである。後漢の鄭玄(一七二—一〇〇年)が注したが、唐宋五代の間に滅び、残巻を見るのみとなっている。鄭玄より三国時代にかけて多くの注釈が書かれたが、ほとんど失われて見ることができない。ここに魏の何晏(？—一四九年)の『論語集解』があらわれ、今日まで伝わっている。この書は鄭玄のテキストに基づき、鄭玄はじめその他の諸家の注を取捨選択して作ったもので、漢の学者では孔安国・包咸・周氏・馬融・鄭玄、魏の学者では陳群・王肅・周生烈の説が引用され、時に何晏の自説を加える。この書は今に完存する最古の『論語』注で、後世には古注として重んぜられ、今日の『論語』の祖本である。六朝時代、梁の皇侃(四八八—五四五年)の『論語義疏』は、宋の邢昺(九三二—一〇一〇年)の『論語正義』とともに『集解』にさらに注釈を加えたもので、日本においても大いに利用された。

本書は『論語集解』の日本での最古の版本である正平本の忠実な写本である。正平本『論語』とは、巻末に次の刊記を持つ本をいう。

塚浦道祐居士重ねて新たに工に命じて梓に鑿らしむ。
正平甲五月吉日謹んで誌す。
学古神徳楷法日下逸人眞書す。

これによると正平十九(一二六四年)、堺の道祐居士が正平以前にすでに存した日下逸人眞が版下を書した版本を複製したものであろうことが分かる。正平本は毎篇首に篇内の章数を記すにあたり、必ずこれを「何晏集解」の下に置く。この書式の特徴は現存の古鈔本では関東清原家の祖、教隆写定に淵源する東洋文庫藏正和本、宮内庁書陵部藏磨心本などと等しく、内部徴証からも教隆写定本に拠っていることが明らかにされた。中国においては、宋代に『論語正義』が出版されてからは、『論語集解』は単行せずに『正義』に相込まれるか、あるいは再び『正義』から抽出されたものが伝わっていたのである。その点、日本の古鈔本は唐代の鈔本の姿を伝えており貴重である。清の錢曾『讀書敏求記』康熙五十三(一七一四年)に高麗より「高麗鈔本何晏論語集解」を得たという。しかしこの本は錢曾が記す刊記によって正しく正平本の写しであることが分かる。彼はそのなかで「筆面奇古にして、六朝初唐人の隸書碑版に似たり」とこの本が古態を伝えていることに言及している。さらには清の黎庶昌の『古逸叢書』にも正平本跋本が取められている。本書はこの正平初刻本を複製したうえで、その跋文より、最後の一行「学古神徳楷法日下逸人眞書」

を削って刊行したいわゆる単跋本を写したものである。ほぼ忠実な写本といえるが、序文の一行の字数、版心の形式は違っている。

なお本学には、今も東京国立博物館に残る正平無跋本の板木によって、明治になってから刷られた残板本(二冊、p. 860—860)が存する。摩滅の激しい板木によって刷られたもので、諸橋轍次の跋文一丁を付す。

旧蔵者の林泰輔(一八四〇—一九〇二年)は、明治時代の漢学者で、字は浩卿。号は進齋。千葉県の人。東京大学古典漢語科漢書課を卒業し、東京帝国大学文学部助教授、東京高等師範学校教授。甲骨文字研究の開拓者として著名な他、『論語』研究史を体系化した『論語年譜』および『附録』(初版一九一六年、1936—1946)二巻は、随所に彼の『論語』関係書集の一端を示しており、ことに日本における『論語』史を具体的に眺め渡すことができる。また最晩年の成果として『論語源流』(自筆稿本二冊、p. 860—136)がある。本書は中段に『論語』校訂本文を載せ、その上段に先秦の諸書に見える関連する孔子の言行を記し、また下段には『論語』との関連が明らかではないものの類似する言語表現を記載してある。本学蔵本を、すでに影印刊行された慶應義塾大学斯道文庫蔵本(阿部隆一解題、汲古書院、一九七一年)と比べてみると、両者同じ装丁ながら、後者において付箋などで挿入された部分が前者においては本行に書き込まれているので、本学蔵本を浄書本とすることができよう。彼の蔵書のうち四書を中心とした六九一部が没後、一九二二年十二月に嗣子林直敬によって、東京高等師範附属図書館に寄贈され、「林文庫」として収蔵された。

(参考) 川瀬一馬「正平本論語」『日本書誌学之研究』講談社、一九四三
武内義雄「正平版論語流布」『武内義雄全集』二、角川書店、一九七八
高木三男「林文庫」『筑波大学附属図書館報』一、一九八二
高木三男「正平版論語集解 残板本」『筑波大学附属図書館報』一、一九八五
町田三郎「林泰輔と日本漢学」『明治の漢学者たち』研文出版、一九九八

(谷口孝介)

二 論語集解 (ろんごしつかい) 十卷二冊

(p. 860—16)

慶長年中(一五九六—一六一五)京都 要法寺刊。四周双辺。有鼻。各面七行、一七字。注文双行。縦二六・九四、横一八・七四。刊記 慈眼刊/正運刊/洛濱要法寺内開板。上下巻末に「捐俸買來子孫読之饗及借人爲不孝矣 藤原俊將」と墨書する。印記「坊城藏書」「藤氏」「俊將」。(三印とも坊城家。「吾香山房之印」(木村素石)。「南摩文庫」(南摩綱紀)など)。

京都の日蓮宗の寺院、要法寺は慶長年間に「沙石集」「太字記」「文選」など和漢仏書に亘っての活版印刷を行なったことで有名である。本書もそのひとつであるが、他と異なり整版本である点が特徴である。これに先行する活版本が存したかどうかは未詳である。この本も前述した『論語集解』と同じく、「何晏集解」の日本の古鈔本に拠ったものであろうが、毎篇首の章数を記すにあたって、篇題の下、「何晏

集解』の上に記す。この形態上の特徴は文永本・高山寺本などの中原家本系統に顯著に見えるもので、要法寺本の出自を示すものであろう。また日本の古鈔本の共通した特徴のひとつである述而篇の「君子亦覺乎」の五文字の脱文が、この本では補われている。おそらく底本の段階で宋版本などによって補われたものと思われる。なお本書には本書とほぼ同版と思われる、慶長年中の無刊記整版本を蔵している(一冊、p.800-15)。

注(一) 上下巻末に署名する坊城修持(一六九〇—一七四九年)は、船橋寺家から出た俊英を祖とし京都小川に住し、小川坊城と称した名僧。俊持は好學の士で唯大納言に任じられた。

(二) 南摩綱紀(一八三三—一九〇九年)は会澤岩松生まれ、昌平塾に学び、漢学をも修めた。東京高等師範学校教授、詩文に長じており、『内国史略』などの著作、教科書の編纂などに力を尽くした。

(参考) 川瀬一馬『増補古徳字版の研究』日本古書刊行協会 一九六七

(谷口孝介)

三 論語集註(ろんごしつちゆう) 零本(巻一)一冊 (p.800-808)

元龜四(一五七三)年写。春水筆。各面一〇行、一七字。縦二八・六cm、横一九・三cm。袋綴。奥書：于時元龜四年三月十三日書之春水筆丁教廿七 新注論語全部一筆。印記：北總林氏藏。浩卿。(二印とも林泰輔)。

南宋の朱熹(一一三〇—一一〇〇年)の著書『四書集註』(他の三書は『孟子集註』『大学章句』『中庸章句』のひとつ)、『論語集註』の完成は淳熙四(一一七五)年、朱子四十八歳のおりである。理学の完成者としての彼が、何晏『論語集解』に代表される、これまでの訓詁を中心とした古注に対して、哲學的体系を明示した清新な注であり、以降、新注として『論語』の注釈のひとつの標準となった。

本書は日本における、江戸時代以前の『論語集註』の鈔本としては唯一の伝本である。同種の奥書を持つ倭巻として、渋沢栄一旧蔵の青淵論語文庫(日比谷図書館)に巻三と巻十とが存する。これらの奥書によると、春水なる人物が元龜四年三月より十月中旬まで数ヶ月を要して書写した十冊本であったことが分かる。他に伊地知季安『漢学紀原』に巻三の存在を記し、その奥書を記録しているが、所在は不明である。注を本文より一字下けて同じ大きさに書写し、全巻に朱墨による訓点・声点が付してある。たとえば冒頭部を本書の訓点通りに読み下してみると、「子ノノタマワク。学テ而シテ時ニ之ヲナラウ、亦ヨロコバシカラランヤ」となる。この訓法は元和十(一六二四)年ころ刊行されたという『桂庵和尚家法倭点』(一冊、p.449-5)の「而字。(中略)又不涉句読、地アリ。人不知而不知之類。新註、此而字、而毎字、如此点。其故、古点三不説ラク故ナリ。学而時、習之。此一、論語首篇之篇首五字皆肝要字也。争可、不説マ乎。古点三、マナシテ、トキニ、ナラフト、ハカリ説テ、而之兩字不説、曲事也」などという意見と符合する。『桂庵和尚家法倭点』は文字通り、五山の禅僧、桂庵玄樹(一四

一七〇八年)が岐陽方秀の創始した新註本の施点を受けて、創案した新訓法を、末流の弟子、如竹(文之門人)がまとめて刊行したものである。この桂庵点と合致する本書は『論語集註』の最古の鈔本というばかりではなく、古代・中世の博士家の訓法から江戸時代の道春点にいたる、訓詁の歴史の画期に位置するきわめて貴重な資料であるといえよう。横並びに三つ打たれた濁点や独特の形の朱の声点にも注目したい。

旧蔵者、林泰輔は晩年、大正九(一九〇〇)年によろやく本書を見出すことができた。ために、大正五年刊行の『論語年譜』には残念ながら触れられていない。

(参考) 林泰輔『元龜鈔本論語集註に就て』『支那上代の研究』通光社 一九二七
川瀬一馬『近世初期に於ける経書の訓点について』『日本書誌学之研究』講談社 一九四三

(谷口孝介)

四 古文孝経(こぶんこうきよう) 一巻一冊 (123.7-1014)

寛文九(一六六九)年写。葉室頼業(葉上)筆。船橋経賢(葉下)加點。各面六行、一三字。注文双行。縦三〇・二cm、横二二・五cm。袋綴。奥書：此古文孝経今猶旧板依無ノ之不憚老筆今書写了点朱以舟橋経賢自筆付之了于時寛文九年六月日前大納言頼業(花押) 印記：冷泉府書(下冷泉室)。宝玲文庫(フランク・ホーレー)。為経(下冷泉為経)。

孔子が曾子に説いた孝道が書かれている。曾子の問流の著、『論語』と並んで儒教の基本図書として重視された。『孝経』に今文と古文とが存し、今文に鄭玄注、古文に孔安国伝が伝えられることは『尚書』と同じ。今文は十八章、古文は二十二章と章数に相違があるが、内容的には古文に闕門章が多いことを除いては、章の分段の差異であつて大差はないといえる。注釈については、六朝を通じて同注の消長があり、ことに隋の開皇十四(五九四)年に孔安国伝が再発見され、劉焯によって校定されて地位を得たものの、当時の儒學者によって劉焯偽作説が唱えられた。しかし現在では『尚書』と同じく、魏晉の間の偽作であるとの考えが有力である。その後、唐の玄宗によって開元十(七一)年、天宝五載(七四六年)に二度の御注が頒布され、孔鄭二注は唐宋五代の間に忘却していった。

日本においては平安時代には御注本が朝廷の儀式において使用されたが、奈良平安に伝来していた『古文孝経』孔安国伝も平行して利用されており、それが博士家に伝承されて、仁治二(一二四二)年の清原教隆校点本以下、清原・中原の両博士の手によつて数種の孔安国伝鈔本が伝わることとなる。清原家においても鎌倉の仁治本に対して、京都清原家の家本を移した三千院本との間で本文上の対立が見られる。この対立のなかで本書の位置付けを試みると、大題を「古文孝経」とすること、今字で書すこと、忠誠章第十七の「必有長也」の四文字が存すること、などによつて、鎌倉系統の本文であることが分かる。しかし清原家の家本を忠実に写している

わけではなく、仁治本の孤立する箇所などは他本に従っており、中立的な本文となつてゐる。これは恐らく奥書にいう書写者の依るべき本を作るといふ志向からきてゐるのではないだろうか。

注(一) 葉室頼業(二六一五―一六七五年)は、藤原朝修家流、權大納言に任ず、『源氏物語』、『葉室頼業記』を撰す。

(二) 船橋経賢(一六四〇―一七〇八年)は、明経博士を世襲した清原氏の嫡流で、式部少輔に任ず。後水尾上皇の侍読をつとめる。

(三) 下冷泉為経(一六五四―一七三二年)は、葉室頼業の三男、下冷泉為元の養子となる。大納言に任ず。

(参考) 坂本良太郎「我が国に於ける孝經古鈔本の系統」『文化』二五 一九四〇
林秀一「孝經字論選」明治書院 一九七六

(谷口孝介)

五 古文尚書(ごぶんしょうしよ) 零本(存卷八) 一冊 (p.816-17)

永正十一(一五二四)年写。清原貞賢(貞)筆。各面有界七行、一四字。注文双行。縦二七・四、横二一・四。袋綴。全体に朱墨による訓点と墨による校合書入れがある。奥書「永正十一年四月二日以唐本書写之即加朱墨訖」少納言清原(花押)印記。東(清原官家)南摩文庫(南摩綱紀)。

同筆の倭巻である巻七・卷十が京都大学附属図書館に蔵されている。

『古文尚書』は四十六卷。『尚書』の尚は上の意で、上代の堯・舜から夏・殷・周の三代にわたる伝承的な歴史を書いた書物。『書経』ともいう。秦の焚書にあつていったん衰微したが、前漢にいたり当時通行の字体である隸書で書かれたいわゆる『今文尚書』が行われていたが、景帝のとき、魯の恭王が孔子の旧宅を譲りたさいに、古い字体の科斗文字(おたまじゃくしに似た文字)で書かれた『尚書』が出てきた。これを孔子の子孫の孔安国が解説して注を書いたといわれるが、今伝わるのは晋代の偽作とされる部分を含む。注釈は『今文尚書』に付けられた後漢の鄭玄の注があつたが、その呪術的な経書解釈が魏晉の頃には忌避されて、新出の『古文尚書』に付された孔安国伝が用いられるようになった。

日本においてもこの傾向は継受されて、『学令』の規定にかかわらず孔安国伝および唐の孔穎達『尚書正義』が利用された。したがって日本に残る古鈔本は例外なく『古文尚書』孔安国伝なのである。ただ中国においては孔安国伝が『尚書正義』に組み込まれてからは、古態の伝承が絶えてしまったのに対して、日本の古鈔本は孔安国伝の古態をよく残しているといえる。さらにこれらの中原家、清原家に伝承されてきた古鈔本には、「まろ」(摺有)、「まろ」(摺無)、「まろ」(摺作)、「まろ」(本有)、「まろ」(本無)、「まろ」(本作)などの傍記注が数多く存する。「摺」とは宋版本をいい、「本」とは博士家の証本をいうようである。本書においても篇目「康誥第十一」の上に補入記号を付して、「古文尚書 まろ本」と記す。このことは本書に基づいた本が版本に近似しており、証本とは対立していることを示している。

また篇目の上に記された「正十三」は『尚書正義』の卷数をいう。総じて本書は天理図書館蔵の鎌倉時代末期鈔本と近い性格の本文を持つており、別系統の鈔本ということになる。

注(一) 筆者の清原貞賢(一四七五―一五五〇年)は戦国時代の明徳道の学者、古田兼俱の三男で、清原宗賢の養子となる。朱子学を積極的に取り入れ、新注による家学の発展に尽くし、その講義録は抄物として残されている。『日本書紀神代卷抄』や『伊勢物語』の注釈など、和学にも造詣が深かつた。

(参考) 式内義雄「鎌倉古尚書に就いて」『式内義雄全集 三』角川書店 一九七九
古川幸次郎「尚書孔氏伝解題」『古川幸次郎全集 七』筑摩書房 一九六八

(谷口孝介)

六 文選(もんぜん) 六十卷 二十冊 (p.820-21)

嘉靖元(一五二〇)年 金台 汪諒刊 有異。各面二〇行、二二―二三字。注文双行。縦三〇・二、横一九・五。刊記:「文選目錄の末尾、まろ」嘉靖元年十二月望日金台汪諒古板校正新刊。その前に「金台書舖汪諒見居」として、「宋元板」の翻刻七部、「古板」の重刻七部の広告を掲載する。

『文選』は梁の蕭統(昭明太子、五〇一―五三二年)の撰になる、前五世紀の東周から編者と同時代の六世紀の梁に至るまでの優れた文学作品を集めた現存最古の詞華集であり、正文のみで三十巻であった。作品を賦・詩・騷・七・詔・冊・令・教などの三十七の文体に類別しており、作品選択の基準としては、昭明太子の序に「事は沈思より出で、義は翰藻に帰す」とあるように、深い思索に基づきつつも、しかるべき修飾の施された作品であることが求められた。隋唐の間にいくつかの注釈が書かれ、日本にも将来されていたようであるが、顯慶二(六五九)年に奏上された李善注六十巻以外は現存しない。李善注の特色は、作品の言語表現の典拠と用例を挙げることにとらめ、私意による解釈を行わないというものであった。典拠との往還運動によって豊かな表現となり得ている『文選』所収作品の要所を突く注釈方法であり、ひいては日本の古典注釈の方法にも影響を与えていることなる優れたものであった。古代においてその李善注『文選』が広く読まれたことは、解説において述べた。ただし、李善注は正文の意味の理解のために十分でない点があり、その欠を補うものとして、開元六(七一八)年に、呂延濟・劉良・張統・呂向・李周翰の五人による五臣注『文選』が奉られたが、粗雑で誤りが少なくないといわれる。

本書は静嘉堂文庫蔵の明徳元張伯顔本「李善注文選」と同じく、巻首に「蕭統文選序」「李善上文選註表」「呂延濟進五臣集注文選表」があり、その後に「文選目錄」がくる。各巻巻頭は第一行「文選卷第幾」、第二行「梁昭明太子撰」、第三行「唐文林郎守太子右内卒府録事參軍宗賢館直學士李善上」、第四行「奉政大夫同知池州路總管府事張伯顔助卒重刊」とあり、次に子目を列する。この体例はほぼ張伯顔が掲げた南宋淳熙の尤表本やその尤表本に直接よつた清の胡克家本と同じであるが、

これら明覆元本は第四行が一行分多く取られているため、子目を列するところ、一行分追い込んで本文は同じ行から始まるように工夫されている。尤素本・胡克家本と比較するにそれぞれに文字の異同が認められる。「西京賦」(巻二七才)の「若驚鶴之群舞」は、群字を明覆元本のみ正しく作り、尤本・胡本は鶴字に誤る。また巻二十七卷末も尤本、明覆元本は李善注にない「古詞君子行一首」を五臣注本より補うが、胡本は触れない。ここなどは胡本より明覆元本が、尤本に忠実な箇所である。尤本にあえて五臣注本に言及する箇所があるところから、むしろ尤本が六臣注からの抽出本ではなく、李善注本に基づくものである一証となろうかと思ふ。

なお本書は第三冊、第四冊、第十二冊、第二十八冊の四冊については胡克家本で補っている。ただし胡本各巻末の「胡克家重校刊」の刊記はなく、各巻頭の印影は切除されて裏打ち紙があらわれている。しかもこの四冊も含めて全冊にわたって、表紙に清朝の文書を反古として利用している。しかもこの四冊が取り合わされたのは中国でのことと分かる。しかもこれら四冊は胡本と全同でなく、玄字の欠画の様子などに違いが見られる。疑問が残るところである。

(参考) 斯波六郎『文選諸本の研究』京都大学人文科学研究所 一九五七
向嶋成美『李善注』『文選』研究 文芸春秋 一九九一
岡村繁『文選の研究』岩波書店 一九九九

(谷口孝介)

七・八 李白観瀑図・剡溪訪戴図(りはくかんばくす・せんけいほうたいたす)

江戸初期(一六四〇〜一六五〇年頃)。狩野尚信画。屏風 六曲一雙 紙本水墨。右隻縦一三六・七四、横三三二・二四。左隻縦一三六・八四、横三三二・八四。右隻の「李白観瀑」は李白自身の「廬山の瀑布を望む」二首に基づく画題である。其の二の「日は香炉を照らして紫煙を生ず、遙かに看る瀑布の長川を捧ぐるを、飛流直下三千丈、疑うらくは是れ銀河の九天より落ちるか」との壮大な比喩はあまりにも有名であるが、この画題が生じるには其の二の長詩の十七句目以降の仙人世界に参入したかのような境地を叙するところが契機となつたにちがひなからう。「而して我名山に遊び、これに對して心益々閑かなり。論ずるなかれ瓊液に漱ぐを、且た得たり應顔を洗ふことを。且つ鶴を宿り好むところに、永く願ふ人間を辞するを」この仙界に遊ぶ自由な境地が、左隻の「剡溪訪戴図」の洗輿の振る舞いと通底するよう、構成されているのである。

(谷口孝介)

九 歴聖大儒像(聖賢俊輔)(れきせいだいにじゆぞう) 六幅 (21.4×28.8)

寛永九(一六三〇)年、狩野山雪画。寛永一三年、金世謙賛書。各画面縦一三〇四、横四四・五四。紙本着色。花鳥文飾表装。牙軸。

解説において述べたように、この画幅は、寛永十年の復興釈奠のさい先聖殿に掛けられたものである。その三年後、十二月、朝鮮通信使として来日していた金世謙(世謙)が儒者であることを知った林羅山は、東漢に家蔵の聖賢図像二十一幅の図上に先人の賛語を揮毫してもらつたことを願ひ、東漢はそれに応えて書して返したという(「聖賢俊輔」『羅山文集』六四)。羅山が差し出した賛語は、周子から邵子までの五賢人については朱子の賛、朱子については元の呉澄の賛である。これらはいずれも「聖賢俊輔」(明崇禎五(一六三三)年初版)に記載せられているものである。ここにその賛を画幅の序列に従つて掲げておく。

①周子

道徳千載、聖遠言深。道は衰びて千載、聖遠くして言深む。
不有先賢、孰開我人。先賢あらずんば、孰れか我人を開かん。
書不尽言、図不尽意。書は言を尽くさず、図は意を尽くさず。
風月無辺、庶草交翠。風月無辺にして、庶草交々も翠なり。

②程伯子

揚休山立、玉色金声。揚休山のごとく立ち、玉色にして金声なり。
元氣之會、渾然天成。元氣の會、渾然として天成る。
瑞日祥雲、和風甘雨。瑞日祥雲、和風甘雨。

③程叔子

龍德正中、厥施斯普。龍德にして正中なり、その施し斯に普し。
規画矩方、綱直準平。規のごとく員く矩のごとく方に、綱のごとく直く
允なるかな君子、展びて大成す。準のごとく平かなり。

④張子

知徳者希、孰識其貴。徳を知る者は希に、孰れかその貴きを識らん。
早晩孫與、晚公孫。早に孫・與を悦び、晩く公・孫に遇る。
勇徹華比、一室至道。勇んで華比を徹り、一に變じて道に至る。
精思力踐、妙契疾書。精思力めて踐み、妙契疾く書す。

⑤邵子

訂頑之訓、示我広居。訂頑の訓、我が広居に示す。
天挺人豪、英邁は世を蓋ふ。天挺の人豪、英邁は世を蓋ふ。
風に瀾し雲を纏うら、歴覽際なし。風に瀾し雲を纏うら、歴覽際なし。

⑥朱子

手探月窟、足躡天機。手づから月窟を探り、足は天機を躡む。
閑中今古、醇裏乾坤。閑中の今古、醇裏の乾坤。
義理精微なること、聖牛牛毛のごとし。義理精微なること、聖牛牛毛のごとし。

⑦朱子

心胸恢廓、海濶天高。心胸恢廓なること、海濶く天高きのごとし。
憂傑之才、聖賢之学。憂傑の才、聖賢の学。
景星慶雲、泰山喬岳。景星慶雲、泰山喬岳のごとし。

(参考) 鈴木健二『儒教と題名文字』『解教と題名』②。一九九八
『筑波大学附属図書館蔵 日本美術の名品』二〇〇〇年五月、特別展図録

(谷口孝介)

『萬葉集』研究の流れ

平舘英子

『萬葉集』二十巻の成立は奈良時代後期頃、最終的な編集の中心は、大伴家持と考えられる。その後、『萬葉集』が伝来し、書写されていくことが確実に知られるのは、『古今和歌集』が撰進された醍醐天皇の代（八九七〜九三〇年）である。が、その頃には、『萬葉集』はすでに難解なものとなっていたらしい。天曆五（九五）年、村上天皇の宣旨によって、後宮の梨壺（昭陽舎）に撰和歌所が設けられ、源順・清原元輔・紀時文・大中臣能宣・坂上望城の、いわゆる梨壺の五人は、『後撰集』の撰定と並んで、『萬葉集』の歌に訓点をほどこす事業に取り組んだ。順らの付した訓は短歌が殆どであったが、推定四千首以上とされる。古点と呼ばれるこの訓点を付す作業こそ『萬葉集』研究の嚆矢と言える。以後、『萬葉集』の原文の後にその訓を草仮名で記すことが一般化し、草仮名の撰抄本も作られるようになった。また、古点に訓み残された歌に訓点を施そうとする試みが、藤原道長をはじめ、多くの人によってなされた。これを次点と呼ぶ。『萬葉集』について、六条家の藤原清輔・顯昭といった注釈家の考証的研究も見られるようになり、また『六百番歌合』の判者、藤原俊成や『新古今和歌集』の撰者、藤原定家ら歌人も目を向けつつはあった。

建久三（一一九二）年鎌倉に幕府が開かれ、武家社会に新文化が展開する中で、鎌倉將軍家を中心として『萬葉集』は東国に伝播し、急速な関心を呼び覚ました。三代將軍の源実朝は萬葉調の秀吟を生み出し、定家から相伝秘蔵の『萬葉集』を送られ、歎喜している（吾妻鏡）。実朝の萬葉復興は次代の將軍頼朝を動かした。仙覚に『萬葉集』の校勘を命じるに至る。仙覚は広く諸本を集めて比較し、今まで読めないままになっていた無点歌一五二首に新点を施して、寛元四（一一四六）年には頼朝の命による治定本を完成した。ここに初めて『萬葉集』の歌全部に訓点が付されたのである。仙覚は、さらに翌五年には校点を加えていわゆる寛元本を完成したが、その後も校勘の手を休めず、文永二（一一六五）年・文永三年と重ねて校訂本を作った。文永二年本は、時の將軍宗尊親王に望まれてこれを献上。文永三年本は今日に伝来しており、この系統を代表するのが西本願寺本である。同六年には、『萬葉集註釈』をも完成した。『萬葉集』の最初の本格的な注釈書であり、室町期の『萬葉集』研究に大きな影響を与えた。これは上述のような時代背景のもとで、仏教学、特に悉曇学に学んだ仙覚の優れた学才によってなされたと見られる。その後、仙覚の本文校訂の業を研究面で継承したのは玄覚である。玄覚系統本の『萬葉集註釈』には写本が多く、しかもその諸本には筑波大学本のように「私云」「私勘」といった書入れ注記が多く認められる。それは当時の『萬葉集』への関心の高さと伝与、享受の過程を示すものに他ならないであろう。

南北朝に入って現れた成俊は、『萬葉集』の仮名は萬葉の仮名遣によるべしと主張した。成俊加定の原本は現存せず、その詳細は不明だが、後の契沖の歴史的仮名遣の先蹤として注目される。由阿は関白二条良基に招かれ、講じた『萬葉集』の注を藤沢の遊行寺において『詞林采葉抄』として著し、仙覚に続いて優れた業績をあげた。良基も連歌道の立場から『萬葉詞』を著し、以後『萬葉集』の研究は、連歌師によって担われるようになる。室町時代には宗祇が『萬葉集抄』を著した他に、『萬葉集』の抄出・分類などの業が進められ、中御門宣胤の『萬葉類葉抄』、三条西実隆の『萬葉一葉抄』なども出た。室町期の研究は和歌連歌稽古のための啓蒙的著作という色彩が強いが、連歌師を中心として研究が持続され、『萬葉集註釈』に注記した十仏のように、『萬葉集』の命脈を近世に伝えた功績は大きい。

江戸時代に入ると、幕府が採用した文治政策、また庶民層の文化的進出等が『萬葉集』の広い享受を促した。特に印刷術の発達の影響は大きい。慶長（一五九六—一六一五年）頃に木活字本として、『萬葉集』の活字無訓本、次いで活字付訓本が刊行され、寛永二十（一六四三）年には寛永版本が刊行された。寛永版本は契沖『萬葉代匠記』の底本にとられただけでなく、賀茂真淵を始め、新井白石・谷川士清・石野只軒・本居大平等の書入れ本が残っており、『萬葉集』研究の普及に大きな役割を果たしたことが知られる。

中世以来の研究の伝統は貞門の俳諧師でもある北村季吟の『萬葉拾穂抄』に受け継がれたが、『萬葉集』再発見の動きも起こり始めた。中でも下河辺長流は自由討究の新风により『萬葉集管見』などを著した。水戸家の徳川光圀は『大日本史』編纂を計画すると共に『萬葉集』の注釈に意欲をもち、阿野本『萬葉集』などを入手して『萬葉集』の校合を清水宗川らに、注釈を板垣宗備（臆）らに命じ、一方で長流に水戸家の『萬葉集』注釈の事業を委託した。ちなみに、清水は筑波大学本『詞林采葉抄』の書写者であり、後の『訂正常陸国風土記』の校訂者である西野宣明が弘道館訓導であったことは水戸家の学の伝統を窺わせる。なお、知られるように、長流の業はならず、親友の契沖が引き継いで、天和三（一六八三）年頃から『萬葉代匠記』の執筆に着手、貞享末年頃に初稿本を完成した。光圀の『萬葉集』注釈への意欲は、初稿本にさらなる補訂を促し、その結果、元禄三年に精撰本が完成した。契沖の注釈の文献学的方法と歴史的仮名遣の認識は、『萬葉集』研究においても、古典研究史上においても、極めて重要なものである。

契沖の門から出て、古道学としての国学を樹立したのが荷田春満であり、春満の門に学んだのが賀茂真淵である。真淵は、契沖の実証的方法と春満の直感的・批判的な方法とを、『萬葉集』の深い理解を通して統一し、文学としての『萬葉集』の研究に新生面を開き、『萬葉考』『冠辞考』などを著した。その学風は創見に富み、契沖の説を補正するものも多かった。特に『萬葉集』の歌に対する識見は『萬葉集』を萬葉びとの生の表現活動として理解し、自らの作歌にも萬葉調の復活を目指すことに繋がった。『神楽歌考』『神遊考』に神楽の起源と次第を述べ、「東遊歌曲」「神楽歌」「風俗歌曲」「催馬楽歌曲」などの歌謡に興味を示しているのも、同様の理解を思わせる。古代の歌集として『萬葉集』を理解した真淵の作歌活動は、近世和歌の革新にも大きな影響を与えた。その学問——萬葉学は門下の人々を通して普及した。本居宣長が『萬葉集玉の小琴』を著し、『元暦校本萬葉集』校合を企てた荒木田久老の友人橋本経亮が『萬葉集（校異本）』をなし、『萬葉名所歌集』の筆者、楳取魚彦は萬葉風の詠歌でも知られる。また、加藤千蔭の著『萬葉集略解』は平易な全注として広く学ばれ、歌壇にも影響を与えた。真淵門下以外では、『古葉略類聚鈔』を世に知らしめることとなった江田世恭の影写の功が大きい。

『日本書紀』の研究は、奈良時代から平安時代には絶えて訓読——古訓中心の研究であったが、鎌倉室町時代には、卜部家系の古典研究の継承と忌部家などの中世的宗教観に基づく古典の新解釈という二つの流れを持つ。『日本紀略書』は前者の流れに位置づけられよう。近世に入ると、文字の訓詁を根底において、実証的な研究が進められるようになり、今日的な「学問」の方法が見いだされていく点は『萬葉集』研究に重なる。実証的な研究において、『三國史記』の受容は、『日本書紀』がその資料として引く『百濟記』『百濟新撰』『百濟本記』などとの比較において意味を持つ。

一〇 萬葉集註釈(仙覚抄)(まんようしゅうちゅうしやく・せんがくしゅう)

十卷五冊

(911.13—136)

釈仙覚著。江戸時代初期、複数の手による写。堀杏庵(号)校正本。縦二六・九四、横一八・二四。各面九行、二五字前後。袋綴。外題無し。表紙内側に「仙覚抄」。奥書 卷十末奥書 文永六年壬申夏一日於武藏国比企郡北方麻ノ師字郷政所注之了ノ權律師仙覚ノ建治元年十二月二日以作者仙覚律師自筆ノ本教人書寫訖ノ同日一校畢 玄覚ノ此十帖以律師玄覚之本如系因令相伝ノ又重考分書入之更不可有類本雖為一詞能々可借須如眼寿不可説々々ノ十仏 奥書は卷六を除く各卷末にあり。ただし、卷三は「仙覚」の署名のみ。識語 卷三・五 正意一考、卷十末 寛永十三年丙子夏六月 正意一考(朱)

本書は鎌倉時代中期、天台宗の僧仙覚による『萬葉集』の注釈。仙覚は常陸の人。建仁三(一一〇三)年生。十三歳から『萬葉集』研究を志した。後に將軍頼朝から『萬葉集』校勘の命を受けて、寛元四(一一四〇)年に校訂本(治定本)を作り、それまで無訓の歌百五十二首に新点を施した。その後も校勘を続けて、翌年寛元本、さらに文永二年本、文永三年本を作った。文永一(一一六五)年頃から草稿は執筆していたらしく、卷一の奥書に「文永六年二月二十四日記」とあり、卷十の奥書に「孟夏(四月)二日了」とあるようにわずか一ヶ月余で、『萬葉集註釈』を完成させた。内容は、始めの総論部分で、萬葉集の名義(トナリづのこの葉)説、成立(聖武天皇時代、橘諸兄・大伴家持共撰説)を述べ、本文では『萬葉集』中の難解歌(佐佐木信綱によると八一一首)を抄出して注釈する。東歌・防人歌の注が多いのは武藏国に住んだからか。仙覚の注釈は多くの文献(散逸した『風土記』を含む)を引用、仏教学、特に悉曇学の組織的方法に学び、諸本による本文校勘・調点研究に基づいて、道理(論理)と文証(文献徴証)に立脚した論証をすすめている。

仙覚の校訂の業を継承したのが玄覚(号)で、仁和寺本(号)を除く現存諸本はすべて玄覚書入本の系統である。本書はさらに、南北朝時代に十仏(号)の手を経た系統の一本。内表紙に「仙覚抄」とあり、本文は片仮名交じり。訓は漢字の右に片仮名書き。現存する同系統のものに内閣文庫本・彰考館本・神宮文庫本・蓬左文庫本等があるが、十仏本の中で片仮名九行書きは本書と蓬左文庫本のみ(他は片仮名十行書き)で、共に「正意」の識語をもつ。『萬葉集註釈』は本来振仮名は無かったとされるが、本書には振仮名がかなり見られ、朱引(地名・人名・年号・書名など)を区別する。朱点を持ち、「私云」「私勘」「本云」といった勘注を付す。例えば、「山越」の歌(卷一・六)の注に対する「私云勘之……」の朱書きの位置や卷十、防人歌の注に「仙覚自讚」とある点なども、蓬左文庫本にのみ共通し、近い関係にあると推測される。

注(一) 聖徳太子 天正十三(一五八五)寛永十九(一六四二)年、儒家。近江に生まれる。名は正意。字は敬夫。杏庵は号。医を曲道補正館に、句読を南禅寺の梅心正徳に学び、後漢学を藤原愷高に学ぶ。尾州公に仕え、法眼に叙し、晩年には幕府に仕官して諸家書伝編纂に携わった。

(二) 玄覚 生没年未詳。鎌倉時代の人。比叡山の僧。歌人。早く建長七(一一五五)年には藤原朝

家第二十首の作者となる。『経拾遺集』以下の勅撰集に四百八集。

(三) 仁和寺本(貞和二(一一四七)年の奥書・九冊巻)は最古の冷泉時雨亭文庫蔵本(弘安十一(一一八〇)年)に次いで古く、冷泉時雨亭文庫蔵本が玄覚系統本であることからその資料的価値が高い。

(四) 十仏 生没年未詳。鎌倉時代末期から南北朝の人。建歌作者。坂氏。康永元(一一四〇)年、伊勢大神宮参詣記を著し、時に六十歳。『日本一の才学の者也』(『香伝抄』)などと評された。『萬葉集』に付句十七句。発句一句。

(参考) 佐佐木信綱『萬葉集の研究 仙覚及び仙覚以前の萬葉集の研究』岩波書店 一九四一

武田祐吉『萬葉集抄・仙覚・仙覚本』萬葉集大成二 平凡社 一九五三

『仁和寺藏萬葉集註釈 仙覚抄』木下正俊「解説」『京都大学西語国文学部資料書目録』臨川書店 一九八一

『冷泉時雨亭書書 卷第十八』竹下登「解説」 朝日新聞社 一九九四

小川晴彦「国文学研究資料館蔵『萬葉集註釈』紹介と巻第一輯目―仙覚『萬葉集註釈』の本文研究に向けて―」『国文学研究資料館紀要』二二 一九九五・三 (平館英子)

一一 古葉略類聚抄(こはよりやくるいじゅうしゅう) 零本五冊 (9212—76)

江戸時代中期以降、江田世恭による新写本『古葉略類聚抄』の写し。縦二七四、横一九・五四。各面一〇行前後、各行二五字前後。袋綴。外題 書き題簽「古葉略類聚抄」。以下五まで。序首に「新寫古葉略類聚抄」。序に「安永六年十月浪速江田世恭記」。奥書 卷八末 建長二年九月十二日書寫之(花押)、卷九末 建長二年九月廿九日書寫之(花押)、卷十二末 建長二年十一月二日書寫之(花押)、卷名未詳の巻 建長二年六月三日書寫之(花押) 印記 十河藏書之印

『古葉略類聚抄』は、編者・成立年未詳。『萬葉集』の歌を題材で分類した書。平安時代中期に始まった和歌の内容による分類は、『萬葉集』にも及び、藤原敦隆(号)が『類聚古集』を撰した。『古葉略類聚抄』は直接ではないとしても、『類聚古集』の影響を受けていると見られる。ただし『類聚古集』が、歌の形式から短歌・東歌・旋頭歌・長歌と分けたあとに各部について事物別に分類しているのに対し、『古葉略類聚抄』は事物に即して分類することをまず目的として形式上の差は考慮されていない。現存歌数は『類聚古集』の三八一八首に比べて約半数(本書では一八八九首)である。題詞を低く、歌を高く書き、漢字の右傍に片仮名で訓を記すが、かなりの歌において歌の正文が一部分、時には全体にわたって片仮名に改めてある。こうした点で『類聚古集』には及ばないが、次点本の一つであり、『萬葉集』校勘資料として貴重といえる。『古葉略類聚抄』は古く、春日若宮神主千鳥家に伝えられた。建長二(一一五〇)年六月三日から十一月二日までの書写奥書のあるもので、奈良興徳院と、お茶の水図書館(巻第八)とに現蔵。書写者の花押があり、江田世恭(号)は中臣祐茂(号)とするが未詳。後に水戸家で延宝八(一六八〇)年に写した本が彰考館文庫にあるが、安永六(一七七七)年に、春日若宮にあった上記の写本について、江田世恭、井上高軌(号)、

植村萬言(萬言)が模写し、その次第を書いた序を付した。新写本系と呼ばれるこの系統によつて、『古葉略類聚抄』はようやく知られるようになった。本書もその系統の一つで、朱墨の書入れが見られる。なお、江田世恭らの模写したものは阿波蜂須賀家より歴代弘賢を経て國學院大學図書館に蔵する。

注(一)藤原教隆 延久二(一〇七二)〜保安元(一一二〇)年。平安期の歌人。源俊賴の下流。『類聚古葉』の編纂者として、『萬葉集』研究史上に大きな足跡を残した。頼朝に博士の者と評される。

(2) 江田世恭 ？〜寛政七(一七九五)年。江戸中期の國學者。代々大坂江戸堀に住んだ家傳。通稱富田屋八郎衛門。字は植夫。和漢の書籍に通じ、琵琶、香道をよくし、古葉の鑑定にすぐれ、「言八極め」の名をもつて世に知られた。但書法師に学び和歌に巧みであった。

(3) 中臣祐茂 正治元(一一九〇)〜文永六(一二六九)年。鎌倉期の歌人。春日若宮神主。

(4) 井上高軌 未詳。奈良の人。

(5) 植村萬言 ？〜天明二(一七八二)年。江戸期の地誌作者。大和國の人。本居宣長とも交説があった。

〔參考文獻〕佐佐木信綱・橋本進吉解説『複製古葉略類聚抄』竹相会 一九三三

古水登『古葉略類聚抄考』『國語』四九・一 一九四七

佐佐木信綱他『校本萬葉集』巻一・十二 岩波書店 一九四四 新增補一九八〇

(平館英子)

一二 萬葉集(校異本)

(まんようしゅう・こういぼん) 二十卷二十冊

(429-1)

橋本経亮・山田以文校。文化二(一八〇五)年 京都 出雲寺文治郎刊

題簽 萬葉和歌集 校異一(一廿)。内題 萬葉集巻一(一廿)。四辺双辺。無界。

各面八行、一八字。縦二六・八四、横一八・四四。奥付：右以元曆校本并諸本校訂

異同標上層訖／梅宮禰宣正五位下橋経亮／右橋亮菅校正比書未卒業而卒今繼其志再校

／文化二年八月 吉田社公文所藤原以文／宝永六(一七〇九)年丑季春古辰／御書物

師 出雲寺和泉屋／文化二年乙丑之冬 出雲寺文治郎 印記 江亭圖書記

惠岳(註)が梨沖・真淵の説及び自説を記した『萬葉集旁註』(寛政元(一七八九)

年刊)本の、その傍注を削つて、橋本経亮(註)・山田以文(註)による諸本との校異を

上欄に記し、訓を付した版本。本書には賀茂真淵等の校異を朱墨で書写してある。ただし、朱は巻十五まで。

注(一)惠岳 享保四(一七二九)〜寛政元(一七八九)年。常陸國那珂山の僧。安永八年には主として

『萬葉代匠記』によつて『萬葉考』の説を非難した『萬葉源要抄』及び『萬葉集源要』も刊行

(2) 橋本経亮 主曆五(一七五五)〜文化二(一八〇五)年。江戸時代後期の國學者。京都梅宮の神

宮。橋本・梅宮等と号し、有職故実を究め、和歌もたしなめた。萬葉の古葉の断簡を集めて影写した『萬

葉集半註』を伝え、中でも「中臣祐茂切萬葉集」は貴重。上田秋成・小沢康庵らと交流があった。『橋本

白隠』等の著がある。

(3) 山田以文 宝曆十二(一七六二)〜天保六(一八三三)年。鶴所と号し、阿波介と称す。神職吉田

家の家主。有職故実を藤井貞幹に学び精通した。『鶴所談』などの著がある。

(平館英子)

一三 詞林采葉抄(しりんさいようしゅう) 十卷五冊

(4205-05)

由阿着。貞享元(一六八四年)写。主一堂(清水)宗川筆。

各面二一行。片仮名表記。縦二八・五四、横二〇・二四。袋綴。各冊無題箋。

識語 詞林采葉十卷藤澤沙門由阿之所撰也(中略)／水戸羽林君之殿命俱山本春正訂

萬葉集／借 羽林君所藏若倉具起香卿本再訂／日本末終篇而已若倉卿本詞煩而迂

旧本／文約而達尚雖不備采之全者較之前日則／加亦不少焉併跋數語以尽其情云尔／貞

享甲子臘月日 主一堂宗川(花押) さらに「朱之本奥書云」として「寛永第八之曆

後之十月九日」の日付をもつ「冷泉之支流為曲跋」を付す。

本書は、相州藤沢遊行寺の僧由阿(二九一年〜?)が二条良基の求めに応じて貞

治五(二二六〇)年五月上洛し、七月初めまで良基に『萬葉集』を講じた際に書かれ

た注釈書。巻一から五では地名、巻六から九の前半では枕詞や難語の考証が行なわれ、

巻九後半で「人麻呂萬葉以前率木」「人麻呂入唐不」「古語探採」、巻十では「旋頭歌」

「長歌短歌」「萬葉集書様」「萬葉集時代」「萬葉集選者」「萬葉集点」として述べる。

仙覺の学統にたち、博引旁証しつづ精緻な考証を展開する点に特徴があり、『萬葉集』

研究史上貴重な文献である。

現存する諸本の系統としては、書写年代の古い天理本(一四〇五年書写)、京大本

(一四二二年書写)などの略本系と、江戸時代初・中期書写の広本系の流布本とが対

立する。筑波大学本は後者に属するが、略本系の本と校合してイの書入れを施してい

る点や、前に示した「冷泉之支流為曲跋」を付すところなど、彰考館本や書院部蔵藤

浪本の特徴と一致する。また、筑波大学本第三冊の末尾に「校合本云」として、「寛

永辛未閏十月三日之夜灯下以古本一校了／岩倉羽林君秘本也少々有差違乎／古藤子

書」とあるのは彰考館本第一冊の識語と同一であり、前掲筑波大学本の筆者、主一堂

宗川の識語の内容とも合わせて、彰考館本を参照して校合を行なったことが明らかで

ある。同じ広本系でもこの系統は引用される証歌の数が特に多い点で注意され、由阿

の学風をよく伝えていると言えよう。

筑波大学本の筆者清水宗川(一六一四〜一六九七年)は、飛鳥井雅章に歌と歌学を

学び、水戸徳川光圀に仕え、彰考館修撰となる。山本春正とともに『萬葉集』諸本の

調査・校勘を行ない、江戸歌壇でも重きをなした。なお、識語に登載する岩倉具起(一

六〇一〜一六六〇年)は、従二位権中納言。明暦三(一六五七)年に、飛鳥井雅章らと

ともに後水尾院から古今伝授を受けた。

(参考)小島善之「由阿・良基とその著書『萬葉集大成2』」平凡社 一九五三
阪口博章「京大本詞林采葉抄跋」『萬葉』一一 一九五四
同「由阿『詞林采葉抄』賞書」『甲南大学紀要文学編』一一 一九七五

(山崎健司)

一四 萬葉名所歌集 (まんようめいしよかしゅう) 五卷一冊 (4212-21)

模取魚彦著。安永七(二七七八)年六月七月頃写。邦(松井泰樹か)ほか筆。墨付一丁六丁。遊紙一丁。各面一五行(後述①④⑤)、同一〇行(同②③)。縦二三・八〇、横一七〇。袋綴。

『萬葉集』には地名を詠みこんだ歌が多い。それは当時さまざまな階級に属する歌人たちが矚目するところの自然を詠んだ結果だが、作者のなかには地方の任国に赴く者や遣外使、防人たちが含まれ、かれらは各地の山・川・湖・海・原・野・村・里などの名称をしばしば作中に詠みこんだため、地域的に広範囲に及んでいる。これら地名に関する研究は中世以前にも試みられたけれども、一篇の書物として現れるのは江戸時代のことであった。本書は、下河辺長流の『萬葉集名考』、契沖の『萬葉名所歌』、海北若沖の『萬葉集師説勝地篇』などに続き、安永四年に成立した著作である。版本はなく、『国書総目録』によれば、現存する本書の写本は、本学所蔵の一本のみという。

内容は、萬葉集の歌を①大和②畿内③東海④東山・北陸・山陰・山陽⑤南海⑥西海・二島に区分、それを国・郡の順に分類し、地名ごとに、歌人別・配列の順に集成するというもの。たとえば、大和国については、その構成を郡・地名に順して順に示せば、冒頭に「大和」を詠みこんだ歌を十三首挙げ、以下「吉野郡」「吉野(山・川)」「御舟山・象の小川など全十七項目」「宇智郡」「宇智大野以下三項目」「宇陀郡」「宇太の野など四項目」「添上郡」「寧楽・春日・高円・佐保など全十三項目」「添下郡」「昔原の里以下九項目」「高市郡」「藤原・飛鳥・橘の嶋など全三十二項目」「十市郡」「香具山など十一項目」「城上郡」「三輪など十四項目」「山辺郡」「布留以下三項目」「葛上郡」三項目、「葛下郡」三項目、「広瀬郡」一項目、「笠群郡」四項目、「郡名未詳」ならしの岡など九項目。立項された地名を詠んだ歌は訓み下して列挙され、題詞は載せず、作者名のみを示す。また、同一項目に同一作者の作が複数ある場合には掲載順に一括して載せる。なお、『萬葉集』に歌が載っていない国も国名だけは挙げてあり、国名のうち注意すべきものには『和名類聚抄』『古事記』『日本書紀』『続日本紀』の訓が示され、地名についても簡単な注記が示される場合がある。

魚彦(二七三二-一七八)年)は下総国香取郡佐原(現佐原市)の人。奥門四天王の一人。真淵の没後、奥門の指導的地位につく。著書に『古言秘』『続冠辞考』『萬葉集千歌』『萬葉集新釈』など。萬葉風の詠歌でも知られる。本学所蔵本は、②③が別筆(筆者・年代不明)だが、他は奥書によれば安永四年の本書成立直後に彦根藩の学者小林義兄が作った写本を、同七年六月七月に「邦」なる雅名をもつ人物が写した由。義兄と接点をもつ「邦」は、彦根藩家老松井泰樹か。

(参考) 福井久藏『大日本歌書類聚 上巻』不二書房 一九二六
木村浩三『模取魚彦』『国学者研究』北海道出版社 一九四三

(山崎健司)

一五 訂正常陸国風土記 (ていせいひたちのかくにんぎ) 一冊 (4314-1)

西野宣明校訂・標註。天保十(一八三九)年水戸旺松軒刊。袋綴一巻一冊。墨付三八丁、本文每半丁八行、各行一六字詰。冒頭に「常陸風土記序」と題する小宮山昌秀の文(立原任浄書。每半丁七行、各行一三字詰)と会澤安の文(每半丁七行、各行一四字詰)を掲げ、末尾には「書常陸風土記後」と題する西野宣明の文を載せる。外題「常陸風土記」内題「訂正常陸風土記」柱刻「常陸風土記」。

『常陸風土記』は、播磨・出雲・豊後・肥前とともに今日に伝存する五風土記のひとつ。和銅六(七一三)年五月の「畿内・七道の諸国の郡郷の名は好字を著け、其の郡内に生ずる所の銀銅・彩色・草木・禽獸・魚虫等の物は、具に色目を録し、及土地の沃瘠、山川・原野の名号の所由、又古老相伝の旧聞異事は、史籍に載せて言上せよ」(『続日本紀』、原漢文)という官命に応じ、国庁において撰録、国司の名において提出された公的な地誌。現存の他の四風土記と比較してみた場合の本風土記の特徴として、地名起源説話を中心とする伝承の採録に留意していること、文章表現にすぐれ、とくに四六駢儷体の美文が織り交ぜられていることなどが挙げられる。その成立は、諸説があるものの、「石城郡」の陸奥国所管と「菊多郡」分郡の記事から養老一(七一八)年五月以前、それに里制に関する記事内容を勘案して靈龜元(七二五)年以前とするのが妥当である。

その伝承については、鎌倉時代に仙覚『萬葉集註釈』、『新日本紀』、『歴代』等に記事が引用されていることよって知られるほかは、現伝本が登場する江戸時代まで明らかでない。伝存する諸本は、いずれも江戸時代延宝年間に加賀前田家蔵本を書写した彰考館本から伝播したものと認められる。だが、彰考館本の段階で、すでに多くの誤りがあり、そのままでは意味の取れないところも多く、彰考館本以下の写本においては、本文の改訂案が傍書されたり、それらを本文に取り込んでしまったりといったことが、しばしば行なわれていた。

水戸藩士で弘道館訓導の西野宣明(一八〇一-一八八二年)によって校訂・出版された本書は、凡例によれば、(甲)鹿島神宮本・(乙)彰考館本・(丙)松下見林本・(丁)昌平文庫本・(戊)小寺清先校訂本・(己)晴保己一刊本・(庚)伊勢貞丈本・(辛)荒木田久老比校本の八本を得て校正したといひ、それら諸本の異同や諸説が上欄に標註として示されている。本文研究が進展した今日の視点で見ると、未熟な点が少ないが、天保十年五月以来、明治初年に至るまで数度にわたって増刷され、本風土記のテキストとして広く流布した。

(参考) 飯田博樹『常陸風土記 解題』『茨城風土史研究』茨城県 一九六八
秋本吉郎『風土記の研究』ミネルヴァ書房 一九六三
林崎治恵『常陸風土記刊本集成(上)』『風土記研究』一〇一九九〇-一〇

(山崎健司)

賀茂真淵著、寛政三(二七九)年写。青木(藤原)普根筆。

墨付五八丁。遊紙一丁。各面八行、注文双行。縦二七〇、横一九〇。袋綴。識語。

明和三年八月より始めて十月に書はてたりことし七十のよはひなれば物わすれわすれやすくして且事にうみがちなればはかくしからずなん右は真淵の詞也寛政三年六月初つかたより始めて七月廿日写畢/齡六十五歳にて書藤原普根子

真淵の『神楽歌考』と言え、一条兼良の『梁塵愚案抄』上巻にかれが書入れを施した校注本の、その書入れを集成したものが数種あることが知られている。ところが、本書は、題箋に「神楽歌考 全/普根自筆并書人」とあるものの、愚案抄の書入れに基づくものではなく、明和三年(二七六〇)真淵七十歳の年に成立した『神遊考』別名『賀茂翁存稿』、『神遊歌考』の写本である。なお、頭注には、真淵の門弟猪諸成の見解(神楽・毛止女子等の項など)も見られ、筑波大学本の特徴を示している。

本書の特色としては、真淵が自身の校注本の底本に於て用いた愚案抄本を離れて鍋島家本系の古本の本文(裏書をも含む)を底本とした点が、まず挙げられる。鍋島家本の特徴は、採られた歌の数が多く、譜があり、詳細な注記と神楽の次第などをするす裏書をもつ点にある。近世の国学者たちが神楽歌を研究する際には、多く愚案抄に依つていたことを思えば、真淵の晩年の進境が窺えらると同時に、その識見の高さを認めることができよう。ただし、鍋島家本『東遊歌・神楽歌』と比較すると、鍋島家本の本文の表記は萬葉仮名、同裏書は萬葉仮名・平仮名・片仮名を混在させるが、本書ではすべて萬葉仮名に改め、本文を他本または傍書によつて校訂した箇所も少なくない。また、鍋島家本では神楽歌の前に東遊歌を置くのに対し、本書では神楽歌の後に東遊歌を置き、神楽歌内部の順序も、鍋島家本では「官人の次にある『難波湯』を、大前張末尾の『踏香取』の後に置くなどの操作が加えられている。注釈は、歌詞の説明・出典の考証にとどまらず、冒頭において神楽(神遊び)の起源と次第を詳細に述べる点に特徴がある。

筆者青木(藤原)普根は、江戸の人青木朝恒の妻。もと吉原の妓女といい、真淵の学問に影響を受けた。平生より真淵から写本や書入れ本の作成を託されていたと見う

(参考) 福井八郎『大日本歌書集成』二二巻房 一九一八

小西基一『日本古典文学大系 近代歌謡集』解説 岩波書店 一九五七

土橋寛『神遊考』『日本古典文学大系』岩波書店 一九八四

鈴木神『青木普根と『神遊の書』』『船山学舎報』四 一九八七

(山崎健司)

ふり・かぐらうた・ふぞくのうたふり・さいばらのうたふり) 一冊

安永五(二七七〇)年写。小林義兄筆。六〇丁。各面二行。縦二七〇、横一九・五。袋綴。識語。右東遊歌・風俗歌・賀茂縣主所蔵自筆書入之本也/安永五年丙申七月三日写之 小林連義兄 内題および揚職順 東遊歌・神楽歌・備馬楽歌・風俗歌

「東遊歌」は主に祭事に用いられた東国の歌舞。『続日本紀』天平玉字七(七七〇)年正月十七日条にある「東国の楽」、『三代実録』貞觀二(八六二)年二月十四日、東大寺大仏供養の条にある「東舞」もこれとされる。雅楽として奉奏された記事の初見は宇多天皇の寛平元(八八九)年十一月。楽譜は延喜二十(九二〇)年に勅定されている(鍋島家本・賀茂臨時祭歌次第)。「神楽歌」はここでは宮中で奏される神事歌謡。宮廷神楽は天皇即位の際に催される琴歌神楽に発し、記録の上では貞觀年間の曲目制定が最も早い(『中右記』天仁元(一一〇八)年十一月二十三日条)。「備馬楽」は雅楽ふうの編曲された民謡のこと。文献上の初出は広井女王の薨去をする『三代実録』貞觀元年十月二十二日条で、女王の伝のなかに「特善備馬楽歌、諸大夫及少年好事者、多就而習之焉」とある。「風俗歌」は地方歌謡のことだが、ここでは王朝貴族のあいだで愛唱された数十曲の著名な歌をいう。「日本書紀」天武四(六七〇)年二月九日の勅令にみえる諸国百姓の歌は風俗とみられ、平安朝になると宮廷の大歌所で教習されたりしい。以上四つは、江戸時代の国学者たちによつて「四譜」とよばれ、古代歌謡の資料としてしばしばとりあげられた。

「四譜」を一括するテキストとしては、小山田(高田)与清『楽章類語抄』(文政二(一八一九)年刊)が著名であるが、その附言によれば、小林義兄の筆になる真淵自筆書入れ本の写本(すなわち現筑波大学所蔵の本書)を対校本として用いたという。筑波大学本の本文の特徴を「四譜」それぞれについて示すと、「東遊歌」および「神楽歌」は鍋島家本の系統に属し、鍋島家本の際だった特徴である詳細な注記や裏書、また譜や次第もきちんと記載されている。「備馬楽」は奥書に「天治一(一一二五)年春三月……」と書かれ、呂・律の順に歌が並ぶ藤原系統の天治本と同じ。「風俗歌」は『類語抄』本が省略した重複歌八首を載せる。以上は『類語抄』の採用する底本と基本的に一致。「類語抄」は与清の師村田春海が明和九(一七七七)年京都で写得した「やんごとなき大殿の秘本」を底本として対校を行なったものだが、真淵の所蔵本はその古譜本と近親関係にあるといえる。本書について与清は「風俗歌の左に、朱墨もて草仮名に歌文書れたり、また鳴鳳集の備馬楽同音楽の名、和名抄の説なり書つたり、こは義兄がしわざにやありけん、此本大かたよろしけれど、織錦大人(春海)の伝本にくらべればものならず」と述べる。なお、小林義兄は彦根藩の学者。真淵や春海との接点は不明だが、筑波大学本の頭注に本文とは別筆で「演按」とあるのは、春海門の清水兵臣の見解と思われる。

(参考) 高野武之編『日本歌謡集成』巻二 東京堂 一九四一

小西基一『日本古典文学大系 古代歌謡集』『解説』 岩波書店 一九五七
上田正昭『鍋島家本』『神楽歌』『解説』『日本庶民文化史料集成』二・三二書房 一九七四

(山崎健司)

一八 日本紀略書 (にほんぎききがき) 五冊

(3240—339)

慶長十三(一六〇八)年写。(中臣) 祐孝筆。平仮名交じり。ソ・ナリ体抄物。朱点朱引。外題 日本紀略書/木(火・土・金・水)(打付書) 第二冊のみ表紙後補。一枚目仮表紙「日本紀略書/火」 奥書 此抄無流布者也堅可禁外見而已/天正十九(一五九二)年(辛卯) 孟冬六日書写功畢 祐範(在判) /于時慶長十三(一六〇八)年(年次戊申) 歳十月十三日書写畢 祐孝 印記 西荏文庫^注 (第一冊表紙、第五冊終丁、第一冊表紙は紙箋に押印)

『日本書紀』講説の集大成ともいえる卜部兼方『新日本紀』以降も、『日本書紀』の講説は中世を通じて様々の場で行われ、数多くの関書類を今日に伝える。その中心となる大きな流れとして、吉田兼俱、清原宣賢、吉田兼石と続く、吉田卜部家における講説・伝授がある。吉田家の説は、兼俱講説の関書が『桃源抄』をはじめ数多く残されており、吉田家説に「兼兼良『日本書紀纂疏』」を取り込んだ『日本書紀抄』、いわゆる『宣賢抄』に代表される。建仁寺向足院蔵『神代抄』(小林千草氏によれば『神代上下抄』)は、宣賢の講説を和仲東端が記したものとされるが、これをもとに兼俱の関書と『日本書紀纂疏』の説、さらに兼石の講説とその時折の談話を加え、さらに私見をもって述作したのが、和仲東端の巻子本『日本書紀抄』であり、大きく破損しているものの西足院に伝わる。本書は、これを書写したもので、同系のものとして、これ以上の破損を恐れた利峯東鏡によって書写された向足院蔵冊子本『日本書紀抄』(三冊寛永元年写)と、尊経閣蔵『日本書紀神代抄』とが知られる。奥書にある中臣祐範は『春日正預祐範記』、『統群書類従』二下^注などを残す春日大社の神官であり、祐孝もそれにつながる人物であろう。

吉田家説は、兼俱・宣賢の二人によってほぼ大成されており、両者の講説の関書がその中心をなすが、本書はそこに兼石の説を多く取り込んでいるところが、大きな特徴であろう。兼石の講説では、永祿十(一五六七)年のものが比較的流布しているが、本書には、そこには見えない固有の兼石説も見られ注意される。

注(一) 西荏文庫は、国学者で伊勢松阪の豪商 小津桂菴の蔵書
(参考) 小林千草『日本書紀抄の国語学的研究』清文堂出版 一九九二

(乾 善彦)

一九 三國史記 (さんこくしき) 五十巻九冊

(3430—1)

(李朝中期以降?) 写。三人以上の手になる奇合書。朱点、朱引。朱墨の頭書。『三國史記』は、朝鮮半島三國(新羅・高句麗・百濟)の歴史書。高麗金富軾等撰。仁宗二十三年(一一四五)年成立。『三國遺事』と並んで三國時代の歴史を知る基本資料である。原三國史が高句麗中心の記述であったのに対して、新羅の資料を増補し新羅中心の記述に改めたのが現在の『三國史記』の姿であるという。

伝本としては、正徳壬申(一五二二)年慶州において李維福が、李太祖二年甲戌の慶州刊本を重刊したもの(慶州玉山書院本、京都大学蔵本など)が善本とされ、また、校訂本としては朝鮮史学会本(一九八八年)とその重刊本(一九九二年)が広く利用され、以後の校定本や訳注本もこれによるものが大きい。その他、古活字本や版本が幾種類もあり、また、東京帝国大学本などの校訂本もいくつかあるようだが、諸本研究や本文校訂については、なお検討の余地がある。近年、学習院大学東洋文化研究所から、刊本二種の影印が出され(学東叢書)、韓国においても正徳本を影印して諸本を校訂した『八校勘三國史記』が出版されるなど、その機運は高まっているが、諸本の探求もいまだ十分といえず、本書のような書写本の全体像も明らかでないのが現状である。本書は、写字が稚拙で脱字脱字も多く、決して善本であるとは言えないが、これを含めた諸伝本の総合的な研究は、『三國史記』の受容の問題も含め重要な問題であり、今後の研究の進展が待たれる。

(参考) 朝鮮史学大系編『三國史記』国書刊行会 一九二八・一九四一
学習院大学東洋文化研究所編『三國史記』(学東叢書上) 一九六四、同『三國史記 韓字本』(学東叢書下) 一九八六

金井培校編『八校勘三國史記』財団法人民族文化推進会 一九七三、修訂版 一九八二
井上秀雄訳注『三國史記』一・四(『東洋文庫』平凡社 一九八〇) 一九八八
倉田謙敏『完訳三國史記 上・下』六興出版 一九八〇・一九八一

(乾 善彦)

写経と仏教教学の世界

乾 善彦

一、古写経と写経活動

わが国で写経がいつごろから始まったか、明らかにすることは困難である。『日本書紀』には、天武天皇二（六七三）年三月の記事に「是の月に書生を聚へて始めて一切経を川原寺に写さしむ。」（原漢文）と見え、これを公的な写経事業の濫觴となす。もちろん、欽明天皇十三（五五二）年、百濟聖明王よりの仏教公伝以来、經典の書写は行われたと考えてよい。

推古天皇十五（六〇七）年には、聖德太子による『勝鬘經』、『法華經』講説の記事を見る。この時の講説にあてられるのが、世に伝わる『三経義疏』、殊に太子自筆とされる『法華經義疏』であるが、その真偽は疑問とされ、将来経である可能性も指摘される。近時では、『書紀』の太子記事自体を疑う説も提出されている。

天武二年の記事以前に、孝徳天皇白雉二（六五一）年冬十二月晦に、味経宮に二千一百余の僧尼を請けて一切経を読ませたことを記録する。新都、難波長柄豊碓宮遷都に関わるものである。天武はその後、四年十月に諸国に一切経を覓めさせ、六年八月、飛鳥寺にて一切経を読ましめていた。川原寺における一切経書写完成を受けたものとされる。その他、『書紀』には、『無量寿經』（舒明十二年、白雉三年）、『大雲經』（皇極元（六四二）年、祈雨）、『孟蘭盆經』（齊明五（六五五）年）、『仁王經』（天武五年、持統七（六九三）年）、『金光明經』（天武五年、九年、朱鳥元（六八六）年、持統六年）、『金剛般若經』（天武十四年）、『薬師經』（朱鳥元年、天武不子）、『観世音經』（同）の講説あるいは説経の記事が見える。

現存する最古の写経とされる『金剛場陀羅尼經』（某氏蔵）の奥には、「歳次丙戌年川内国志貴評内知識為七世父母及一切衆生敬造金剛場陀羅尼經一部藉此善因往生浄土終成正覚」という教化僧宝林の願文が見える。丙戌年は、「川内国志貴評」（大宝令以前の郡表記「評」の使用）とあるため、天武十四（六八六）年のものとされる。この願文は、同時期の造仏銘に通じるところがあり、多くの金銅仏同様、史書に記されるような公的な性格をもつものではなく、記録に残らないこのような写経が多く行われていたことを窺わせる。奈良朝に入ると公私における写経活動が盛んになる。長屋王の発願による和銅五（七一三）年の和銅経や神龜五（七二八）年の神龜経を始めとして、大部の写経が行われたが、そこには写経所組織の存在が認められる。光明皇后の発願による有名な五月一日経（天平八（十二年））を書写した写経所は、はじめ皇后宮職に属していたが、やがて造東大寺司に組み込まれ、東大寺写経所として大々的な国家事業を展開する。正倉院文書の中には多数の写経所関係のものが含まれており、写経所での写経生の生活を窺い知ることが出来る。この時期、天平六（七三四）年聖武天皇勅願一切経、同十五年大官一切経、神護景雲二年称徳天皇勅旨一切経など、勅願一切経が官の写経所で書写される一方、各地の寺院等で僧や地方の有力者によっても写経事業は盛んに行われた。石山寺一切経は、久安四（一一四八）年、念西の発願によるものであるが、そこには奈良時代に書写されたものを多く含む。この中には、そういった私的な、いわゆる知識経が多く認められ、播磨国賀茂郡既多寺における『大智度論』や讃岐国山田郡舎人国足の発願による『瑜伽師地論』はその好例である。これらには、中央に劣らない水準の高さと、自由でおおらかな筆遣いが認められ、当時の写経技術の高さ広さを窺わせる。

二、仏教教学の世界と悉曇学・音韻学

奈良時代には南都六宗といわれる華嚴宗・法相宗・三論宗・律宗・俱舍宗・成実宗が教学の中心であり、東大寺・元興寺・薬師寺・興福寺・法隆寺などにおいて修学に研鑽していた。当時は一寺一宗というような形式ではなく、たとえば、東大寺には華嚴宗と法相宗とがあつたというように、一寺中に複数の宗派があつたようである。そこへ、平安時代初期、真言宗・天台宗が将来され、密教教学が加わることになる。

弘法大師空海を祖とする真言宗は、高野山金剛峰寺を本山として、京では仁和寺・醍醐寺・石山寺などにおいて、その教学が盛んに行われ、石山寺の淳祐、高野山の明算などの著名な学僧を輩出した。真言宗は南都の古宗との関係が深かったが、これら真言宗諸寺で用いられた訓点からも、南都古宗との関係が考えられる。「大智度論」の第一群点、「瑜伽師地論」の第四群点はその典型的な例である。「金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法」の乙点図は、天台宗比叡山において第一群点をもとにして生まれた五群点のひとつであるが、宇多天皇宸翰とされる『周易抄』にも使用されており、これが天台宗比叡山から真言宗仁和寺に伝わり、さらに真言宗石山寺へと伝わったことを示す資料として注目される。「金剛頂大教王経」もまた、仁和寺における教学の一端を示している。

一方、「止観輔行伝弘決」「十八契印」は、天台宗比叡山における教学の伝承を示すものである。伝教大師最澄を祖とする天台宗では、慈覚大師円仁、智証大師円珍がさらに入唐し、悉曇（梵字）学の書が将来され、山門比叡山延暦寺、寺門園城寺を中心に『妙法蓮華経』などの經典読経のための音義研究が盛んであつた。特に明覚（一〇五六―一一〇六年、あるいは一一二二年以降）は、『反音作法』『悉曇要訣』など、漢字音韻研究において偉大な研究を残し、後世への影響のもつとも大きな存在であつた。

いったい、当時の音韻研究はひとつには漢字音韻研究、ひとつには悉曇研究との流れがあつたとされるが、その中で、五十音図は、漢字の反切を理解するために、悉曇の知識を利用して生み出されたものと考えられる。仏教教学の世界において、両者は不可分のものであつたといつてよい。「文字反」の五十音図は、明覚のそれを受け継ぐものとして注意される。中世に入ると悉曇学は承澄、信範へと受け継がれ発展してゆくが、新たな展開を見るといわけでもなかつたようである。むしろ、この期に将来された『韻鏡』が次期の音韻研究の中心となることを予感させる。信範の流れを受けた印融の、『反音極学抄』をはじめとする多くの著述は、広い学識の中に新しい『韻鏡』の知識を取り入れているが、まさに中世の悉曇学の雰囲気と代表するものといえよう。

近世の漢字音韻研究は、文雄の『磨光韻鏡』に代表されるように、『韻鏡』研究を中心に大きく進歩する。一方、契沖による歴史的仮名遣の発見は、宣長の漢字音あるいは字音仮名遣研究をへて、やがて音韻と仮名遣との関係への把握にいたる。石塚龍麿『仮名遣奥山路』の上代特殊仮名遣の発見は、橋本進吉氏による音韻的解釈を待つことになるが、その記念碑ともなるものである。奥村栄実『古言衣延辨』および大矢透『古言衣延辨證補』によるア・ヤ行のエの区別の発見もその道程の一つである。

『萬葉集』の作品の中にこれら仏教教学の世界を見ることは、山上憶良の作品や一部の文字遣を除いて、それほど容易なことではない。しかしながら、彼らの背後には、確実に仏教世界があつた。仏教教学の展開は、やがて、音韻研究につながって、『萬葉集』研究に大きな進歩をもたらす。強引ではあるが、これも因縁である。

二六 文字反

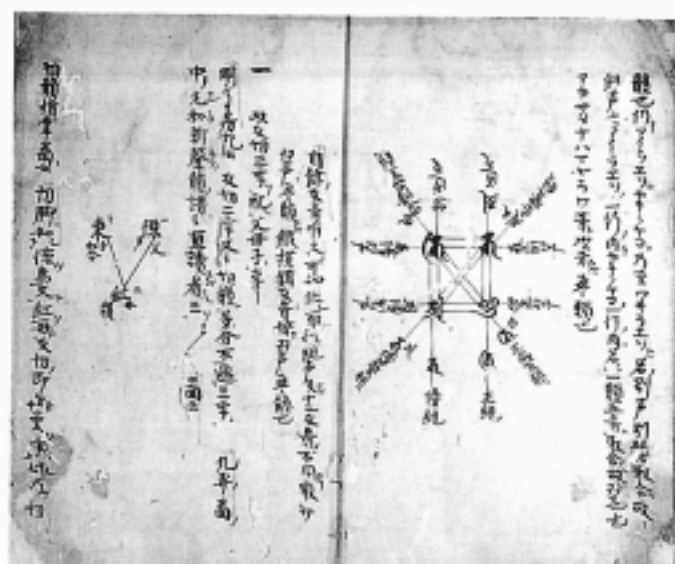
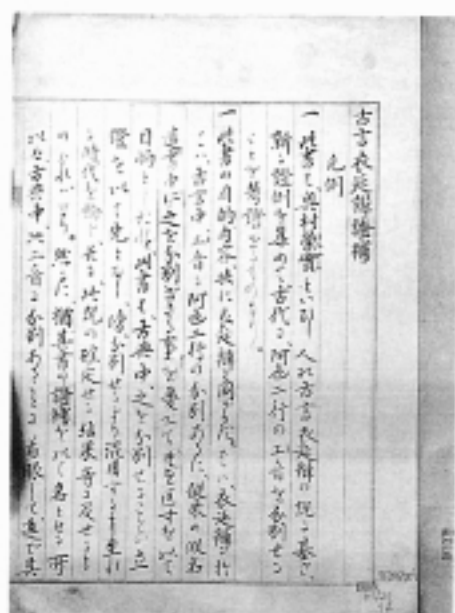


二七 反音種学抄



(永正七年書写本)

二八 古言衣延辨證補



(天文四年書写本)

天平六(七三四)年写。白点。天安一(八五八)年加點。楮紙。卷頭右下隅に「紙廿二」とあるが実際は十九紙。江戸時代改装。奥書 天平十六年歲次甲戌十一月廿三日 写針間國賀茂郡既多寺/物部連大山 印記 石山寺一切經(黒印)

『大智度論』は、龍樹著(これを疑う説もある)、姚秦の鳩摩羅什訳。百卷、『摩訶般若波羅蜜經』の注釈書で、般若の空の思想を問答体で解説したものである。

本書は、墨印があるとおりに石山寺一切經の一部であり、石山寺旧蔵。戦後流出し、昭和二十七年に東京教育大学が購入(二万五千円)したものである。戦前には九十八卷が存していたようだが、現在は四十卷が石山寺に残されており、他には、天理図書館(卷五十三、六十九ほか)、東大寺図書館(卷五十七、七十三)、京都国立博物館(卷六十九)、東京大学国語研究室(卷八十二)、唐招提寺(卷八十四)など、各地に所蔵される。ただし、なお所在不明のものも多いという。石山寺一切經の『大智度論』は、大部分が「天平六年……既多寺」の奥書をもつ、播磨國賀茂郡既多寺(氣多寺とも、廢寺)におけるいわゆる知識經(地方での勸進による寫經)である。一人一巻から數巻の奇進と見られ、針間國造氏を中心に賀茂郡在地の多くの人名が見える。巻により筆者が異なるが、いずれも天平寫經の趣を感じさせながらも、筆面に拘泥しない自由な面が認められ、地方における知識經として貴重である。本書も、やや大ぶりの字で、謹直な中にも自由闊達、柔らかな筆法が窺われ、天平寫經の典型とはまた異なった趣を感じさせる。

この「天平六年……既多寺」の奥書をもつ巻々には、白点が施されており(第一群点)、卷五十に「天安二年山階寺伝大徳所講/天安二年山階寺伝書」の白墨の職語があることから、天安一(八五八)年に山階寺(興福寺)大徳の講義を伝えるものとされており、南都における初期訓点資料としても貴重である。

- (参考) 大矢透『仮名遣及仮名字体沿革史』勉誠社 一九六九
- 大坪伊治「石山寺藏大智度論加點經緯考」『国語国文』二七 一九四一
- 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』汲古書院 一九九六
- 田中埴堂『日本寫經綜覽』三明社 一九五三
- 奈良国立博物館編『奈良朝寫經』東京美術 一九八三
- 『植村和堂コレクション古寫經』根津美術館 一九九四
- 林哲也『大智度論 卷第七十一』筑波大学附属図書館刊『つばね』四九 一九九五
- 『筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品』二〇〇〇年五月、特別展図録

(乾 善彦)

天平十六(七四四)年写。白点。朱点。楮紙。十四枚。もと卷子本を、江戸時代に折本に改装。奥書 天平十六年歲次甲申三月十五日/讃岐国山田郡舍人国足 印記 石山寺一切經(黒印)

『瑜伽師地論』は、四世紀前半の成立。著者は弥勒(マイトレーヤ)とも無著(アサンガ)ともいうが、漢訳本の系統では、弥勒とする。唐の玄奘訳。百卷。瑜伽行派つまりヨーガによる修行を本とする教の根本經典であり、わが国では『唯識論』とともに法相宗において重視され、奈良時代の遺品も多く、『日本寫經綜覽』には、天平二(七三〇)年飛鳥寺僧賢証の発願書写によるもの(卷二十一、石山寺蔵)をはじめとして、都合九度の例が載せられている。

石山寺一切經蔵の『瑜伽師地論』は、もと百卷、現存四十三卷。この中には、先述天平二年飛鳥寺僧賢証の発願書写本のほか、天平勝五(七五四)年飽田郡(肥後国)建部君虫麻呂書写(あるいは発願)など、奈良時代の知識經を多く取り込んでおり、本書と同じ天平十六年云々の奥書をもつものも多く含まれていたようである。現存のうち、築島裕氏は少なくとも三十一卷、『日本寫經綜覽』では三十五巻が、讃岐での書写であるとされる。『奈良朝寫經』には、同奥書の卷二十一(石山寺蔵)と卷六十五(京都国立博物館蔵)が紹介されているが、本書を合わせて三者とも筆者は異なっており、『讃岐国山田郡舍人国足』は発願者であることが窺われる。『大智度論』同様、一人一巻ないし數巻を分担書写したものであると思われる。

本書はもと卷子本を折本形式に改装したもので、装丁も含め現存の石山寺蔵本と同じであり、江戸時代天明期の尊賢によるもの。これも、『大智度論』同様、戦後に巻間に流出したかと思われる。

本書に加えられた白点は、中田祝夫氏のいわれる第四群点で、やはり南都古宗で加點されたものと考えられ、『大智度論』同様、平安初期の南都における訓点資料として貴重である。

- (参考) 中田祝夫『古点本の国語学的研究 總論篇(改訂版)』勉誠社 一九七九
- 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』汲古書院 一九九六
- 田中埴堂『日本寫經綜覽』三明社 一九五三
- 奈良国立博物館編『奈良朝寫經』東京美術 一九八三
- 『筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品』二〇〇〇年五月、特別展図録

(乾 善彦)

治二年をそれほど溯るものではない。則点は、天台宗比叡山で用いられた第五群点(博士家点と同じく、四隅の点が、左下から右回りに、テニヲハの順になる)をもちいており、天台宗において重要視された經典のひとつであったことが窺われる。

(参考) 高木三男「貴顕圖書二種」(筑波大学附属図書館つくばね) 1994 一九九四

(乾 善彦)

二五 十八契印 (じゅうはちげいいん) 一枚(十一紙継) (188.5-Ku27)

鎌倉時代、建保年間(一二二二-一二二九)以降写。朱点(西墓点)。斐紙十一枚を継ぎ、巻軸、表紙のない巻子装。外題 十八儀軌(打付書) 内題・尾題 十八契印 識語 ○嘉保三(一二〇九)年(丙子) 正月(庚寅) 五日(丙申) 書之了
・同六日於三井寺青龍之禰奉隨唐坊大僧都御室奉受始、然後歸御本移点次日辰時奉受了。僧良修

○件御本奥記云

・長曆二(一二〇三)年五月三日午時於千光院御室移点了僧行規(種か)記

・永承元(一一四〇)年五月廿九日以法橋御房本改之 行規記

・件御本官御房御書也墨点大僧都御室令伝授、御点也 是則法橋御房本様也云々 依大僧都御房仰奉請口(仲あるいは件) 御書移点

・左ノ朱ノカナハ良修奉受時私ニ付タル也

○同年四月(癸巳) 十一日(庚午) 辰時奉受印始則日御室御出京、十三日(壬) 申御入寺云々 同日亥時挑口(癸) 奉受印了、已上

○建久元(一一九〇)年戊寅十一月廿三日賜亮法印御本、書写之了 同廿五日以同本校点

・同十二月五日於大宝院法印座下奉受了、因忠記

○正治三(一一〇二)年二月六日以法印御房御本書写

・同八日以同本校点

○建仁元(一一〇一)、正治三年改元、年二月十六日於近衛室町壇所、從大宝院制權僧正奉受之了、青(静)の字の篇のみを書くか 忠記

○去建保三(一二二五)年(乙亥) 正月(戊寅) 廿二日(壬午) 午刻(魁) 於法印御房御足下以他本奉裏受了、今請出此御本書写之、以充伝持耳、仙朝記

作者は、空海とする説と唐の惠果とする説がある。一巻、灌頂を受け終わった修行者が修行すべき諸尊法の次第、密教における十八の印業について説いたもの。真言宗のみならず、天台宗においても共通して、本書に説く十八道立の次第をとる。

奥書にある、良修(一二〇七-一二五七)は、大納言源俊賢の孫、三河守国俊の子。元奥書にある行規(一二〇三-一二七三)は、小一条院教明親王の皇子。園城寺の大僧都定基に師事、のち大僧正となる。円忠(一一八〇-一二三四年)は、関白近衛基通の子、嘉祿二(一二二五)年、円城寺長吏、仙朝(一二〇一-一二七八)は、

文永四(一二二七)年園城寺別当、のち大僧正となる。以上からも知られるように、

本書は、天台宗寺門派園城寺(三井寺)において相伝されたものであり、もっぱら園城寺で用いられた西墓点(墨点)が、右肩から縦に上中央にかけて、ニシハカの順に並ぶが加点されている。

(参考) 高木三男「仏書二種 御文章(編)と十八契印」(筑波大学附属図書館つくばね) 202 一九九四

(乾 善彦)

二六 文字反(もじはん) 一葉 (400-134)

鎌倉時代初期写。縦二八〇、横四四・五〇。内題に「文字反」。折り返しの外題「反音」。内題の下に「高山寺」の朱印があり、外題の下には「五十三箱」とある。包紙には、「反音一帙 五十三箱 明治十九年八月廿二日信寅」と記す。

もと高山寺(註)の経藏第五十三の箱に収められていたものが、明治期に青木信寅(註)の所蔵となった。戦後古本市場に現れ、当時の東京教育大学(現筑波大学)附属図書館長能勢朝次の決断により、明覚(註)『悉曇要決』(400-134)とともに東京教育大学の蔵に帰した。

この一葉は赤堀又次郎編『語学叢書』(東洋社、明治三十四年)に模写されて紹介されている。後に山田孝雄『五十音図の歴史』(宝文館、昭和十三年)にも正確な模写が掲出された。馬淵和夫『五十音図の話』でも冒頭に写真複製を載せる。

この一葉では内題の後に、

それ一字に借名の付く事三気なり。中而して二字の気を以て一字に合はせ、音を成す。文字反と名づく。(原漢文)

とあり、以後漢字二字で一字の音を示すいわゆる反音(反切)について説明する。

その後「五音云者」として、いわゆる五十音図を挙げる。五十音図の源流は平安時代中期にまで溯ることができ、中世以降ア行のオとワ行のヲとは混乱して位置が逆になり、近世の本居宣長によって訂正されることになる。しかしこの一葉の五十音図では「アイウエオ:ワキウエヲ」となっていて、オとワが本来の正しい位置にある。恐らくは平安時代の明覚の反音法が受け継がれていたのであろう。

注(1)高山寺 京都府尾形町にある真言宗寺院。僧尊家の開創で、明恵上人高辨が華嚴宗の道場として再興。国玉(鳥獸戯画)をはじめとして、多数の典籍を所蔵する。

(2)青木信寅 愛知県の人。明治の初期に函館控訴裁判所判事長、同控訴院院長。古筆の鑑定にも秀でていた。明治十九(一八八六)年没。

(3)明覚 天喜四(一一五五)年(康和二(一一〇二)年)以後、悉曇学者。天台宗の学僧で、加賀屋奥寺に住した。「反音作法」「梵字形音義」等の著書がある。後世に与えた影響は甚大である。

(中澤信幸)

二七 反音極学抄 (はんおんきよくがくしょう) 一冊

永正七(一五二〇)年行高房書写本 一冊 (829.89—864)

天文四(一五三五)年良惠書写本 一冊 (7.400—138)

印刷者。文明十四(一四八二)年の奥書あり。筑波大学図書館には永正七年行高房書写本(以下、永正本)と天文四年良惠書写本(以下、天文本)の二種を蔵する。

天文本は十六丁。縦二四・八cm、横一六・四cm。袋綴。首に目録一丁、第二丁に内題「反音極学抄」、以下本文と続く。

永正本は十一丁(墨付十丁)。縦二五cm、横一八・五cm。こより袋綴。外題・内題を記載した丁は欠落。現在の表紙は江戸期に施したもので、本文紙より大きめ(縦二七・二cm、横一九・四cm)の藍色表紙。初丁に挿入した遊紙も表紙の裏打紙と同じ紙質・寸法で、表紙と同時に付したものである。また最終丁(十一丁目)は本文紙と同質・同寸法の白紙原裏表紙であるが、ここには江戸期と思われる筆で、平安期の歌人源忠季の「中々に散るを見しと思ふらん／＼はなの盛にかへるかりがね」の一首と「麴懸」の墨書、そして花押を刻した墨印がある。

『反音極学抄』は、漢字二字で一字の音を示すいわゆる反音(反切)の方法について説いた書である。この書は次の項目より成る。

- 一 反音大綱事
 - 一 摩多体文和合一轉事
 - 一 紐声雙声疊韻反音事
- 一 梵漢反切配合事
 - 一 從因至果從果向因反音事
- 一 以反切三字配父母子事
 - 一 於梵語抑揚者切四義事
- 一 反略作法事
 - 一 輕重清濁四声分別事
- 一 於漢語二重反中略事
 - 一 六声分別事
- 一 於一字仮名四声分別事
 - 一 六声分別事
- 一 吳漢二音分別事

永正本はこのうち第一項「反音大綱事」と第二項「摩多体文和合一轉事」を欠失している。冒頭が第二項の最終行となっており、それに第三項「梵漢反切配合事」が続く。

第一項「反音大綱事」では漢字の反音に関して承澄（註）『反音抄』からの引用が見られ、第三項「梵漢反切配合事」では信範（註）『悉曇私抄』の「九弄十紐圖」に関する説からの引用が見られる。すなわち、この『反音極学抄』は承澄—信範の反音法を受け継いだものである。

第四項「紐声雙声疊韻反音事」では、反切に「紐声」「雙声」「疊韻」の三種があることが述べられる。この説は承澄—信範にも見られるが、ここでは独自

の説明が加えられている。また第六項「從因至果從果向因反音事」において「五音五十字互具一字事」と題したいわゆる五十音圖が挙げられるが、これは信範『悉曇秘伝記』から引用したものである。

また『韻鏡』『切韻指掌圖』といった、新たに日本に輸入された韻圖を利用して注釈している点も特徴として挙げられる。

印刷は永享七(一四三五)年武藏国久保(現在の横浜市緑区)に生まれる。真言宗の学僧で、幼い頃より京都・奈良、さらには高野山に登り修行したとされる。十七、八歳の頃、三會寺(横浜市港北区鳥山町)の賢繼の弟子となったようである。長祿四年(寛正元(一四六〇)年)には賢繼より醍醐三寶院流を伝授される。また文明十三(一四八二)年までに、宝生寺(横浜市南区堀ノ内)の覚日などから西院流を伝授される。

これ以降印刷は、南関東の有力真言宗寺院で四〇人余の弟子に付法。この弟子達の中には高野山金剛峰寺の第一八七代検校になった寛融のような僧侶もいる。永正十六(一五一九)年鳥山親護寺にて八十五歳で没。著作の数は六十余と言われ、その内容も音韻学・梵語学・漢詩論・密教圖像学・辞書など多彩である。韻学関係の書としては『梵漢配合』『三四反切私抄』『悉曇初心問答抄』などがある。

注(1)承澄 元久二(二〇五)年、弘安五(二二八)年。天台宗の学僧、藤原師家の子。京都小川御所に住したので、世に小川僧正という。天台密教の教相相に関する記事を広く収録した『阿婆抄』二百三十余巻を著した。韻学関係の著作では『反音抄』の他に『悉曇学記正法』がある。

(2)信範 貞応二(一二三三)年、弘安九(二二八六)年または弘安十(二二八七)年。真言宗の学僧で、承澄から悉曇について学ぶ。『悉曇学記開書』『九弄十紐圖私撰』などの著書がある。また中国から伝わった韻圖である『韻鏡』に、初めて注釈を加えた人として知られる。以後『韻鏡』は日本で長く伝えられ、悉曇学・漢字音学に多大な影響を与えることになる。

(参考) 馬場和夫『増訂 日本韻学史の研究』I 臨川書店 一九八四 (中澤信幸)

二八 古言衣延辨證補 (こごんええべんしょうほ) 一冊 (7.420—94)

大矢透著。明治四十(一九〇七)年大矢自筆。四十三丁。十三行美濃朱野紙(東京棟原製)。縦二七cm、横一九・八cm。

本文首に「古言衣延辨證補」、次行に「大矢透述」。凡例末尾に「明治四十年一月 著者識」。裏表紙に、

この本は「古言衣延辨證補」の著者、文学博士大矢透氏の自筆稿本なること、疑うべからざるものなり。東京教育大学文学部教授 中田祝夫 後世の披覧の学者のため、特に明白に誌しておくこととす。

と記した付箋が貼り付けられている。『古言衣延辨證補』は大矢の生前には世に出ることにはなかった。筑波大学蔵

本は大矢の自筆清書本であり、誤記部分は紙の貼付によって訂正される。行間欄外等に書き込みはない。これとは別に『音声の研究』第五輯（音声学協会、昭和七年）に翻刻が掲載されているが、こちらは書き込みのある稿本によつたものである。この書き込みの内容はだいたい筑波大学蔵の清書本に取り入れられているので、この清書本が大矢の最終案と認められる。大矢は最初「古言衣延辨補考」と題するつもりであつたようで、外題、内題、尾題等の書名は上貼りして「一證補」と訂正しているが、目次の前の首題のみ見落として、「一補考」のままになっている。

大矢は巻頭の凡例で、次のように述べている。

此書の目的、内容、共に衣延辨と同じからず。そは、衣延辨に於ては、古言中エ音に阿也二行の分別あるに、従来の假名遣書中に之を分別せざる事を憂へて、そを匡すを以て目的としたれど、此書は、古典中、之を分別せることの立證を以て先となし、傍、分別せるより混用するに至れる時代を論じ、并に、此説の確定せる結果等に及せるものなればなり。然るに、猶、其書の證補を以て名とせる所以は、古典中、此二音に分別あることに着眼して、進で其目的を達することを得たるは、全く其書の指南に依れば也。

奥村栄実の『古言衣延辨』一卷（文政十二（一八二九）年成）は、上代及び平安中期頃まではア行のエとヤ行のエとの間に音韻上の区別があり、それが萬葉仮名で「衣」の類と「延」の類とに分かれて表記されていることを明らかにしたものである。奥村はこの書の冒頭で、契沖の「歴史的仮名遣」^三を補強した仮名遣書である掛取魚彦『古言梯』（明和元（一七六四）年成、明和二年刊）を評価しながらも、ア行のエとヤ行のエを区別していないことを批判する。そしてこの区別を『古言梯』所収の語彙によって照合することにより、『古言梯』を補正している。

奥村は古文獻におけるア行のエとヤ行のエの区別を明らかにするとともに、

この両者の仮名の区別を実践することを主張し、実際に自著でこの仮名の区別を実践している。

これに対し、大矢は凡例で奥村の『古言衣延辨』とは目的・内容が同じでないことを述べる。すなわち奥村が従来の仮名遣書の誤りを正し、ア行のエとヤ行のエの区別を実践することを主張したのに対し、大矢はまず古文獻の中にア行のエとヤ行のエの区別があることを立証し、次にこの両者の混乱した時代を推定し、さらにこの立証の結果を応用できる範囲を示そうとしたのである。

このように大矢の『古言衣延辨證補』は奥村の『古言衣延辨』とは目的・内容が異なるものである。しかし大矢は自著が奥村の書によって導かれたことも忘れてはいない。その結果が『古言衣延辨證補』という書名に現れている。

大矢透は嘉永三（一八五〇）年に越後國中蒲原郡根岸村中高井（現白根市）で生まれた。明治九（一八七六）年に新潟師範学校を卒業し、山梨・茨城県に奉職。明治十九（一八八六）年に文部省に入り、一時台湾總督府囑託を命ぜられる。明治三十五（一九〇二）年、五十三歳で文部省国語調査委員会補助委員となる。これが縁で古訓点資料の存在に気付く、やがて仮名の研究に専念する。『古言衣延辨證補』が成つたのは五十八歳の時である。昭和三（一九二八）年東京帝国大学医学部小石川分院にて七十八歳で病没。日本語史、特に文字・音韻及び訓読の方面に多大な功績がある。『仮名遣及仮名字体沿革史料』『音図及手習詞歌考』『韻鏡考』など、著書多数。

注（一）契沖は、『萬葉集』の注釈を通して、十世紀前半以前の文獻には「定家假名遣」とは異なる仮名の用法があることに気付く、そして契沖は『和字正體抄』（元禄六（一六九三）年成、元禄八年刊）において従来の「定家假名遣」を批判し、古文獻の用例に基づいて仮名遣を説いた。それが『歴史的仮名遣』と呼ばれるものである。ただし契沖の仮名遣は「いろは」四七字の仮名で表記できるものに限られ、「上代特殊仮名遣」や「ア行のエとヤ行のエ」の区別までは考慮されていない。

（参考）中田祝夫解説『古言衣延辨 古言衣延辨證補』鶴岡社文庫 二二 一九七七

（中澤信幸）

特別展「日本古代の学問と萬葉集」

当初企画

哲学・思想学系 堀池信夫(学系長) 伊藤 益

文芸・言語学系 池内輝雄(学系長) 芳賀紀雄

谷口孝介 白井伊津子

附属図書館 山内芳文(館長) 二上一朗(図書館部長)

金井晃 堀内眞也 松田 實

三浦正克(現 小山工業高等専門学校)

展示担当

附属図書館特別展ワーキング・グループ

主査 篠塚富士男

連絡・広報 原澤仁美 大和田康代

ディスプレイ 岡部幸祐 落合厚子

電子展示 平岡 博 真中孝行

会場運営 山崎好子 高橋雅一

図録編集

統括責任 本学教授 芳賀紀雄

概説・解題執筆(執筆順)

本学講師 谷口孝介

東京成徳大学教授 平館英子

熊本県立大学助教授 山崎健司

大阪女子大学教授 乾 善彦

日本学術振興会特別研究員 中澤信幸

図録写真 図書館部情報管理課 岡部幸祐

情報システム課 平岡 博

真中孝行

編集 本学助手 白井伊津子

文献調査 本学非常勤講師 西一夫

本学博士課程文芸・言語研究科 田中真理

筑波大学附属図書館特別展
日本古代の学問と萬葉集

平成十三年十月二十二日

発行 筑波大学附属図書館(館長 山内芳文)

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL (0298) 53-2348



筑波大学
University of Tsukuba